

## ウィーンのおペレッタ 4

## 「銀の時代」— 1. フランツ・レハール

客員研究員 増田芳雄

## 目次

## はじめに

1. レハールの生涯と作曲活動
2. レハールとヴァイオリニスト・指揮者ウィリ・ボスコフスキー
3. レハールのおペレッタ
  - A. 「陽気な未亡人」
  - B. 「微笑みの國」
  - C. 「ひばりの囀るところ」
  - D. その他のおペレッタ
    - D-1. ルクセンブルク伯爵
    - D-2. ジプシーの恋
    - D-3. パガニーニ
    - D-4. ロシアの皇太子
    - D-5. ジュディッタ

## おわりに

## 引用文献

## はじめに

前3報でヨハン・シュトラウスの16のおペレッタのうち、「こうもり」(オペレッター1, 1998)、「ヴェネチアの一夜」、「ジプシー男爵」および「ウィーン気質」(オペレッター2, 1999)、そして他の「金の時代」の作曲家たちのおペレッタ(オペレッター3, 2000)をとりあげた。オペレッター3のうち、オスカー・シュトラウスはむしろ「銀の時代」に属するとするのが一般であろうが、金銀二つの時代の橋渡しになるものと考え、あえてこのオスカー・シュトラウスを「金の時代」の最後に付け加えた。

さて、20世紀とともにおペレッタの「銀の時代」が始まった。「銀の時代」を代表する作曲家がフランツ・レハール(Franz Lehár)であることに異存を唱える人はいないであろう。ウィーンワルツやおペレッタに少しでも関心のある人は、その代表作「メリー・ウイドウ」を知っているであろうし、このおペレッタの中で歌われるワルツの甘い調べを耳にしたはずである。このおペレッタがなぜ日本では「メリー・ウイドウ」と英語のタイトルで呼ばれるようになったのか筆者は知らない。シュトラウスのおペレッタのタイトルはほぼ正確にドイツ語を日本語に訳したものが一般に用いられており、また、オッフエンバックの「地獄のオルフェ」は

「天国と地獄」という、直訳よりむしろわかりやすいタイトルで知られている。「メリー・ウイドウ」の原題は“Die lustige Witwe”であるから「陽気な未亡人」という日本語が正確なはずである。筆者の想像だが、日本の社会的風土から、“未亡人”が陽気であるのはなじまなかったため、英訳名をそのままカタカナで使うことにしたのかもしれない。本稿では「メリー・ウイドウ」という英訳の呼び名をやめ、原題に従った訳、すなわち「陽気な未亡人」としたい。

「銀の時代」のオペレッタ作曲家を列挙することが難しい理由の一つは、「金の時代」とくらべその数が多いことである。しかし、フォルクスオーパで1972-1985年の間に上演された「銀の時代」のオペレッタを見ると（渡辺忠雄、1990）表1のようになる。面白いことに、この上演頻度で見ると、第1位はレハールのオペレッタでなく、カールマンの「チャルダシュの女王」である。「陽気な未亡人」は第2位に入っているが、第3位にはベナツキーの「白馬亭にて」が続き、レハールは第4位、第5位の「微笑みの國」と「ルクセンブルク伯爵」となっている。ウィーンにおける演奏回数は1位でなくても、レハールが「銀の時代」の第一人者であることはベスト5のうち、3曲、ベスト10のうち4曲を占めていることから納得できる。

表1. ウィーンフォルクスオーパーで1972-1985年の間に上演された「銀の時代」のオペレッタ（渡辺忠雄、1990から）。

作曲家	オペレッタ	順位と上演数 ( )
Emmerich Kálmán (1882-1953)	Die Csárdásfürstin	1 (173)
Franz Lehár (1870-1948)	Die lustige Witwe	2 (163)
Ralph Benatzky (1884-1957)	Im weissen Rössl	3 (150)
Lehár	Das Land des Lächelns	4 (118)
Lehár	Der Graf von Luxemburg	5 (115)
Kálmán	Gräfin Mariza	6 ( 87)
Robert Stolz (1880-1975)	Zwei Herzen im Dreivierteltakt	7 ( 83)
Lehár	Der Zarewitsch	8 ( 68)
Nico Dostal (1895-1981)	Die ungarische Hochzeit	9 ( 62)
Leo Fall (1873-1925)	Madam Pompadour	10 ( 56)

これに続くのはカールマンで、ベスト10に2曲、しかもこの2曲はベスト6に入っているから、カールマンがレハールに匹敵する人気を博していることが想像できる。以下、筆者の経験に基づいてこれら「銀の時代」のオペレッタ作曲家のうち本稿ではフランツ・レハールを紹介したい（図1）。

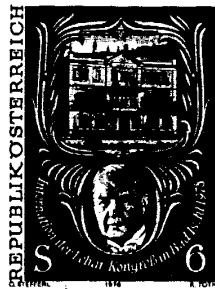


図1. フランツ・レハールの6シリング切手。1978年、バート・イシュルで国際レハール会議が開かれたときの記念切手。

レハールはオペレッタに限らず、「金と銀」など、広く親しまれているワルツを多く作曲している人気作曲家で、これらワルツはもちろんのこと、「陽気な未亡人」や「ルクセンブルク伯爵」の中のワルツも有名である。また、「メリー・ウイドウ」は世界中で人気があり、日本でも上演すれば必ず当たるといわれ、ヨハン・シュトラウスの「こうもり」と世界の、そして日本における人気を二分しているほどである。ウィーンでは元来、夏はオペラ、オペレッタあるいはコンサートはシーズンオフで、歌劇場は閉鎖されるが、近年観光客がふえるにつれ、本来オペレッタを上演しない（ただし「こうもり」は例外）国立歌劇場でも最近、夏に“メリー・ウイドウ”を上演するようになったので驚いている。さすがに観光客を大事にする國である。

## 1. レハールの生涯と作曲活動

レハールの祖先はもともとドイツ人で、ハンガリー（第1次世界大戦後独立したチェコスロヴァキア、現在はチェコ領）で生まれたが、プラハで教育を受けた。祖父まではモラヴィア（Moravia, 現チェコ南部）出身のガラス職人であったが、レハールの父は音楽家で、ウィーンに移り、アンデアウィーン劇場でフランツ・フォン・ズッペが指揮するオーケストラの団員となった。のちに、彼は歩兵連隊の軍楽隊長となり、1864年以降ハンガリーの駐地で生活した。そこで結婚、1870年4月30日にフランツ・レハールが生まれた。一家は1880年、ブダペストに移ったが、フランツは12歳でプラハ音楽院へ入学が許可された。フランツはそこでヴァイオリンを学んだが、同時にドヴォルザークの影響を受け、作曲も学んだ。1888年、音楽院を卒業、エルバーフェルト（Elberfeld, 今日のヴッパータール、Wuppertal）市立劇場で第一ヴァイオリン奏者の職を得た。フランツも父親と同じく軍楽隊長となり、各地を巡った後、ブダペスト、そして1899年にはウィーンの軍楽隊長となり、1902年に軍を退いた。

レハールは全部で15のオペレッタを作曲しているが（表2）、渡辺忠雄（1990）によると、レハールの作曲活動は次の3期に分けられるという：

- (1) 「自己評価」の時期、(1)「陽気な未亡人」（1905）まで。
- (2) 「発展」の時期、「パガニーニ」（1925）まで。
- (3) 「完成」の時期、「（1925-1934年まで）。6つのオペレッタを作曲した。すなわち、「ロシアの皇太子」、「フリーデリケ」、「微笑みの國」、「美しきこの世界」、そして「ジュディッタ」を作曲した時期で、すべてレハール特有の“悲劇的”オペレッタである。

レハールの作曲した15のオペレッタのうち、筆者がウィーン等で観たのは「陽気な未亡人」、「ひばりの囀るところ」そして「微笑みの國」だけである。また、全曲レコードは「陽気な未亡人」、「微笑みの國」のほか、「ルクセンブルク伯爵夫人」、「パガニーニ」、「ロシアの皇太子」それに「ジュディッタ」を持っている。

第二次世界大戦中、レハールはウィーンの西方の保養地、バート・イシュル（Bad Ischl）の別荘に引退したのち、戦後の1946年、スイスのチューリヒに移った。そこで夫人に先立たれ、バート・イシュルに戻ったが、1948年10月24日同地で亡くなった。バート・イシュルでは現在「オペレッタ週間」が開かれ、ヨハン・シュトラウス+ヨーゼフ・ラナーの像が公園にある

など、保養地だけでなく、オペレッタでも知られているが、レハールの別荘は現在「レハール記念館」となっている（図2）。

表2. レハールが作曲したオペレッタ。

初演年	曲
1902	Der Rastelbinder
1905	Die lustige Witwe
1909	Der Graf von Luxemburg
1910	Zigeunerliebe
1911	Eva
1913	Die ideale Gattin
1918	Wo die Lerche singt
1920	Die blaue Mazur
1922	Frasquita
1925	Paganini
1927	Der Zarewitsch
1928	Friederike
1929	Das Land des Lächelns
1930	Schön ist die Welt
1934	Giuditta

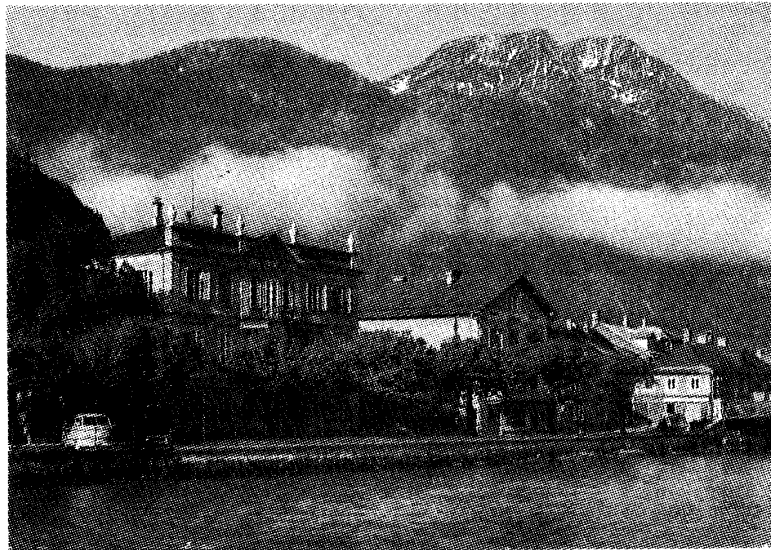


図2. パート・イシュル（Bad Ischl）にあるレハールの邸。現在はレハール博物館（Lehár-Villa）になっている（Kunstverlag Brigitte David-Gründner, Salzburg）。



図3. ウィリ・ボスコフスキー（ヤマハ）。

## 2. レハールとヴァイオリニスト・指揮者ウィリ・ボスコフスキー（図3）

このオペレッタシリーズの1「こうもり」で紹介したように（増田芳雄、1998）、ウィリ・ボスコフスキー（Willi Boskovsky）はウィーン・フィルハーモニーのカペル・マイスター、新年演奏会の指揮者、モーツァルトのソナタの演奏者、それにレコードに記録された多くのオペレッタの指揮者として知られる。この他、ボスコフスキーは室内楽の主宰、ウィーン音楽アカデミーの教授、それに戦前派の音楽愛好家の間ではモーツァルト弾きとしても知られ、ピアノのリリー・クラウス（Lily Kraus）と演奏した「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」全曲盤は戦前、名盤レコードとして愛好された。

このボスコフスキーはレハールと縁が深い。1984年、ボスコフスキーの75歳の誕生日にオーストリア国文部大臣ツイルク（Helmut Zilk）からメダルが授与されたときのインタビューで語られた記録がある（Helmut Strijohann, 1985）。この年から52年さかのぼる1932年、ウィーン生まれのボスコフスキーはウィーンフィルハーモニーのヴァイオリン奏者となった（筆者訳）：

“私はウィーンフィルハーモニーのメンバーとして、そして独奏者としてバーデンで最初の成功をおさめたとき、大変幸せな気分帰宅しました。これから自分の力で自分の道を開くことができるのだ、と。オペレッタについて言うなら、最初が「パガニーニ」、そして「ジュディッタ」で、その頃、私たちはまだ国家社会主義（ナチス）を知らなかったのです。まだ、ドルフス（Dollfuss、筆者註：オーストリアの総理大臣）の時代でありました。そして、神業をもつシンデラー（Sindelar）以外にフットボール選手を知りませんでした（筆者註：ボスコフスキーは少年時代、フットボール選手を志した）。ある日、突然私はフランツ・レハールに

会いに行くよう言われました。彼の家に行き、ウィーン・オペレッタの神様の前に立ったとき、私の心臓はどきどきしましたが、私は彼の優しい眼差しに魅了されました。そして私たちはコーヒーを飲みました。私は大変興奮していましたので、今ならザルツブルク音楽祭に参加するという話と同じように、何も憶えていないほどです。レハールは、ラジオで放送する「パガニーニ」でヴァイオリン独奏をしてくれないか、と言いました。私はその時まだ23歳で、ウィーンフィルハーモニーの第2ヴァイオリンのトップを弾いている身分でした。レハールは非常に親切に言いました：

“私はバーデンで君のヴァイオリンを聴いて感銘を受けたので、君の経歴を調べたのだよ。そして、私は君を推挙することにしたのだ。どうだい、私に言われた仕事をする気はないかね？”もちろん、あの歳で野心に燃えていた私はこの仕事を引き受けました。

当時まだ世に出て10年しか経っていなかったラジオが、音楽の普及にとって重要であることをレハールは認識していました。これを利用すればレハールの音楽が世界中で知られるようになると彼は考えていました。ベルリンのラジオで放送されたレハールの最初のオペレッタは「フラスキータ」(Frasquita)でした。こうしてレハールの多くのメロディーはラジオを通じて広く知られるようになりました。次は「パガニーニ」です。彼の望むようにヴァイオリンを弾くことが私の役目でした。そして私たちの協力は第2番目の仕事になりました。この点についてはもう少し詳しくお話ししなければなりません。

当時、ウィーン国立歌劇場では、もっとも優れたテナーのタウバー (Richard Tauber) がスターで、彼はレハールの親しい友でもありました。レハールはタウバーのささやくようなピアノニッシモ、そして輝く高音のために「パガニーニ」、「微笑みの國」のスー・チョン、「ロシアの皇太子」、「フリーデリケ」のゲーテ、そしてそれにもまして「ジュディッタ」のオクタヴィオのためのアリアを作曲したのです。そして、タウバーは国立歌劇場で最大の勝利を得たいのはオクタヴィオの役だ、と言ったのです。しかし、タウバーのこの夢の実現は困難でした。それは、歌劇場におけるつまらぬ争いごとが原因であったことを私も知ることになりました。著名な、そして尊敬を受けていたカベルマイスターのロゼ (Arnold Rose) に国立歌劇場で「ジュディッタ」の公演をする意図がなかったのです。彼は他に多くの上演計画を持っていたのが反対の原因でした。しかし、タウバー派の強い要請により「ジュディッタ」は遂に国立歌劇場で演奏されることになりました。もっともロゼは最後まで、「ジュディッタ」に反対の姿勢を崩しませんでした。

ロゼの後任問題が起こったとき、突然私の名が浮かび上がりました。この野心に満ちた私という若い第2ヴァイオリニストに大仕事をまかせられるか？いや、ウィリー、頑張れ！こうして私はウィーンフィルハーモニーの第1ヴァイオリニストとしてレハールの指揮の下にこのオペレッタ「ジュディッタ」を演奏しました。ラジオの「パガニーニ」は大変難しい仕事でしたが、正式にカベルマイスターになる6年も前にこうして私は事実上その仕事をさせられたのです。こうして私は「ジュディッタ」でソロを弾くことになりました。そのすぐあと、メンゲルベルク (Willem Mengelberg) 指揮の演奏会で私はリヒャルト・シュトラウスの「英雄の生涯」(Heldenleben) でヴァイオリン独奏をすることになりました。

ところで、レハールと初めて「ジュディッタ」のリハーサルをしたとき、彼は私にあたかも親しい友人のように挨拶し、以後私たちの関係はすばらしいものになりました。私のリードはまだ未熟だったと思いますが、第1ヴァイオリンのパートはうまく私についてきてくれました。レハール自身も、この威厳に満ちた歌劇場で「ジュディッタ」を上演することを名誉に思っていました。そのためでしょうか、他の劇場で演奏されたレハールのオペレッタよりはやや重い傾向がありました。歌劇場におけるフィルハーモニーの巾の広い、すぐれた演奏にレハール自身やや押され気味で、彼は演奏をピアノ（弱く）するように望みました。レハールは指を唇に当てて、しょっちゅう“シーツ”と言っていたのを思い出します。彼はヴァイオリンのことをよく知っていましたが、それは彼が軍楽隊や劇場の指揮者をする前には自分でヴァイオリンを弾いていたからです。プッチーニの影響を受けていたレハールの管弦学法はすばらしく色彩に満ちていました。

最初の衣装を付けたリハーサルはレハール・タウバーの友情によって完全なものになりました。タウバーは実際、すべての人々、男も女も、レハールさえもすっかり魅了してしまいました。“レハール”のタウバーが幕が上がって最初にオクタヴィオとして現れ、“喜びよ、人生は生きる価値がある”を歌ったとき、レハールの顔は輝きました。その歌はトランペットのように鳴り響き、次に中程ではカメオの輝きへと変わっていきました。さらに国立歌劇場の素晴らしい歌い手であるノヴォトナ（Jarmila Novotna）のジュディッタが実に魅力的でした。この魅力的なソプラノはザルツブルク音楽祭、そしてメトロポリタンで名を挙げました。このオペレッタの成功はさらにプロデューサーのマリシュカ（Marischka）に負うところが大きかったです。今のシェンク（Otto Schenk）のように偉大ですが、シェンクとは全く違います。マリシュカはウィーンの人々が聴きたいすすべてのものを知っていましたし、彼らがどのように聴くかを知っていました。彼は新聞でこっぴどく叩かれ続けたましたが、同時に彼の企画した上演の切符は必ず売り切れました。

「ジュディッタ」の初演は1934年1月20日に行われ、大好評でした。幕が下りたあと、舞台上に現れたレハールに対する拍手は今までに例がないほど途方もないものでした。以後「ジュディッタ」は一週間に3回ずつ上演され、私もカペルマイスターの椅子に一週間に3回座り、居心地もしいよくなりました。レハールも一週間に3回、初めと終わりの2回ずつ私と握手しました。こうしてシーズンの終わりまでに私は42回カペルマイスターを勤めました。正確に4年後の1938年1月30日、再びレハールのオペレッタの初演がレハールの指揮とタウバーの歌により国立歌劇場で開かれました。それは「微笑みの國」でした。しかし、このオペレッタを4回演奏した後、私たちは“ナチス”に併合され、もはやタウバーもなく、“微笑み”もなくなりました。しかし、フットボールではシンデラーが2-0でドイツを破りました。もっとも、この時、私たちの國はオーストリアはなく、オストマルク（Ostmark）\*としてでありましたが。

---

\* 筆者註：オストマルクは本来、10世紀頃のポーランド中部の地域を指すが、オーストリア併合のさい、ドイツ帝国の東（Ost）という意味でこのように呼んだのであろう。実際、歴史的にオーストリア国名は原語では“東の國”|Österreich|という。

こうして、レハールとの出会いとなった2つのオペレッタは戦後、のちに述べるように、ボスコフスキーの指揮によりレコードとして聴くことができることになった。

### 3. レハールのオペレッタ

#### A. 「陽気な未亡人」

オッフェンバックのオペレッタやシュトラウスの「こうもり」の原作を書いたフランスの戯曲家メイヤック (Henri Meilhac, 1831-1897) の「大使館随員」を基にして、これもシュトラウスの「ウィーン気質」の脚本・作詞を担当したレオン (Victor Leon, 1870-1940) とシュタイン (Leo Stein, 1861-1921) が「陽気な未亡人」の台本を書いた。この台本をアンデアウィーン劇場の支配人カルチャーク (Wilhelm Karczag) はホイベルガー (R. Heuberger, 1850-1914) に依頼しようとしたが、結局レハールが作曲を担当し、1905年の暮れも押し詰まった12月28日、アンデアウィーン劇場で「陽気な未亡人」は作曲者自身の指揮で初演された。このとき副指揮者を勤めたのが、やはり「銀の時代」のオペレッタ作曲家シュトルツ (Robert Stolz) であった。「陽気な未亡人」は初演から大成功で、以後ヨーロッパ各地で数多く上演され、空前の上演回数を誇るに至った。

{架空の小国ポンテペドロとは?}

このオペレッタの舞台はパリであるが、主役はバルカンの架空の小国ポンテペドロの金持ちの未亡人とその恋人で武官の男である。このポンテペドロ (Pontepedro) はおそらくモンテネグロをもじったのであろう。このオペレッタの原作はフランス人のメイヤックによることは上に述べた。当時、すなわち19-20世紀、今から約100年前のヨーロッパの歴史を考えるとこのオペレッタの背景が判るように思える (表3)。

モンテネグロ (Montenegro) はアドリア海近くの山間部に位置するバルカンの小国で、かつてセルヴィアに従属したツェタ公国として知られていたが、14世紀、セルヴィア滅亡後、トルコに支配されようとする危機に敢然と抵抗し、独立を守った。16世紀以後、人民集会で選挙されたギリシャ正教の大司教を統治者として封建国家を作ったが、ダニロ1世 (在位1696-1735) の後は世襲制となり、国家の外交は親ロシアであった。ペタル2世 (本名ニエグシュ、在位1830-1851) は国の近代化を図り、ダニロ2世 (在位1851-1860) によって政教が分離した。ニコラ1世 (在位1860-1918) はセルヴィア、ロシアと同盟してトルコと戦い、1878年トルコから独立した。そして20世紀に入り、ニコラ1世によって改革が行われ、1910年に王国となったのちの1912年、バルカン同盟に参加して戦争に参加した。第一次世界大戦では連合国についてオーストリアに占領されたが、戦後セルヴィアとの合併を宣言し、ニコラ1世の死後、1921年に合併が実現した。しかし、のちにユーゴスラビアに吸収された。このバルカンは「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれ、ヨーロッパ列強とロシア、オスマントルコが争い、そしてユーゴスラヴィア解体以来、現在も紛争の絶えないところである (表3参照)。

メイヤックのようなフランス人の眼から見ると、この小国の人々は文明大国フランスに憧れ、反対に文明から遅れたこのバルカンの小国に対しフランスは一種の蔑視思想を持っていた



表3. 19-20世紀はじめのヨーロッパおよび東洋の年表

年	ヨーロッパ	東洋
1799	ナポレオン、フランス皇帝	
1804-	ナポレオン、オーストリアと	
1806	プロイセンを破る	
1814-	ナポレオン、セントヘレナへ流刑	
1815	ウィーン会議	
1840		アヘン戦争
1842		香港をイギリスへ割譲
1848	ヨーロッパで革命、フランス第3共和制	
1850		中国で太平天国の乱
1852	フランス共和制倒れ、ナポレオン3世が皇帝	
1853		ペリー、日本に来航
1854	クリミア戦争	日本開国
1858		インドがイギリス直轄領
1860		北京条約
1863		カンボジャがフランス保護領
1864	ロシアがポーランドを鎮圧	
1866	プロイセンがオーストリアを破る	
1867	オーストリア-ハンガリー帝国	
1868		日本、明治維新
1871	ドイツ帝国成立	
1877	露土戦争	
1878	ベルリン条約、ルーマニア、モンテネグロ、セルビアが独立	
1886		イギリスがビルマを併合
1887		フランス領インドシナ連邦
1894-	フランス-ロシア同盟	日清戦争、台湾併合
1895		
1900		義和団の乱
1904-	日露戦争	
1905	ロシアで第1次革命	インドで独立運動
1908	トルコ革命、皇帝廃止 オーストリアがトルコ領ボスニア併合	
1911		辛亥革命
1912-	バルカン戦争	清朝滅亡
1913		
1914	第1次世界大戦	

のであろう。そのことはオペレッタを見た限り明確ではないが、その歴史と歴代王の名前から想像できるように、「陽気な未亡人」の登場人物にツェータ、ダニロ、あるいはニエグシュなど、歴代王の名を転用していることから、このオペレッタが架空の國とはいいながら、モンテネグロをモデルにしていることは明らかであろう。

このオペレッタの音楽を楽譜にしたがって追ひ、ストーリーを紹介したい（曲番号はMusikverlag Doblingerのピアノ・スコアによる）。曲番号は表4に示す。

表4. 「陽気な未亡人」の曲番号（ドプリンガーのピアノ・スコアによる）

- 
1. Akt
    1. Introduction
    2. Duett (Valencienne, Camille)
    3. Entree lied der Hanna und Ensemble (Hanna, Brioche, Cascada, Herrenchor)
    4. Auftrittslied (Danilo)
    5. Duett (Valencienne, Camille)
    6. Finale I (Hanna, Valencienne, Danilo, Camille, Brioche, Cascada, Choor)
  2. Akt
    7. Introduction, Tanz und Vilja-Lied (Hanna, Chor)
    8. Duett (Hanna, Danilo)
    9. Marsch-Septett (Danilo, Zeta, Brioche, Cascada, Kromow, usw.)
    10. Spielszene und Tanzduett (Hanna, Danilo)
    11. Duett und Romanze (Valencienne, Camille)
    12. Finale II (Hanna, Valencienne, Sylviane, Olga, Danilo, Camille, Zeta Kromow, Njegus, usw.)
  3. Akt
    - 12a. Entr'akt (Vilja-Lied)
    - 12b. Zwischenspiel
    13. Tanz-Szene
    14. Chanson (Grisetten-Lied; Valencienne, Lolo, Dodo, Jou-Jou, Frou-Frou, Clo-Clo, Margot, Danilo, Zeta, Kromow, usw.)
    - 14a. Reminiszenz
    15. Duett (Hanna, Danilo)
    16. Schlussgesang (Alle Soli, Chor)
- 

### {音楽とストーリー}

バルカンの小国ポンテペドロのパリ駐在公使館が舞台である。莫大な遺産を相続した未亡人ハンナにはパリの伊達男たちが群がって彼女の歡心を買おうとしている。もともと、ハンナは故郷にいたときダニロと恋仲であったが、二人は仲違いし、ハンナは老人の資産家と結婚した。夫が亡くなったためハンナその資産を相続したが、もしハンナがパリの男と再婚すると、その資産はポンテペドロから失われてしまう。公使はそこでハンナがパリの男と結婚しないで、故郷の男と結婚するよう願っている。そして、その有力候補と目されているのは武官のダニロである。しかし、ダニロはマキシムに入り浸って、そこの女たちと遊び呆けている。

### 「第1幕」

パリ駐在公使館でポンテペドロ国王の誕生パーティーが開催されている(1)。公使の美しい妻ヴァレンシアンヌはパリの伊達男カミーユと不倫の関係にあるが、人妻であることでカミーユとの恋に悩み、2人は恋の喜びと悩みを歌う(2)。このデュエット「私は貞淑な人妻です」は実に美しい(図4)(和訳は渡辺 護、以下同)。

Allegretto moderato.

Val. dies nicht hö-ren will! Ich bin ei-ne an-stän-d'ge Frau und nehm's mit der E-be ge-nau! Ich will der-lei A-ven-tü-ren um gar kei-nen Preis mehr ris-kie-ren! Es ist ja ein tö-rich-les Spiel, das nie-mals uns führt an's Ziel! Sie wis-sen das, hoff ich, ge-nau: ich bin ei-ne an-stän-d'ge Frau!

Fl. Ob. Clar. pp Via. Cor. p Fig. Ob. Clar. II. (schwach) rit. Gl. Spiel 45 Tutti rit. pp

図4. 「陽気な未亡人」のピアノスコア。ヴァレンシアンヌの歌う“私は貞淑な人妻”（曲番号2）。

(Camille)

Ich liebe nur dich, allein nur dich!

私はあなただけを愛しています。

(Valencienne)

Ach bitte schön still!

どうか黙って!

Sie wissen, dass ich dies nicht hören will!

それだけは聞きたくありません!

Ich bin eine anständ'ge Frau

私は真面目な人妻、結婚を厳粛

und nehm's mit der Ehe genau.

に考えています。

Ich will derbei Aventüren

そんなアヴァンチュールに生命をか

um gar keinen Preis mehr riskieren!

けるようなことはしたくない!

Es ist ja ein törichtes Spiel,

よろめきはいけないこと、

das niemals uns führt zum Ziel!

幸福にはなりません!

Sie wissen das hoff ich, genau:

私がまじめな人妻なことをお忘れ

ich bin eine anständ'ge Frau!

にはなりますまい!

そこへハンナが登場（図5）、パリの男たちがハンナの美しさを称える（3）。故郷でハンナに失恋したダニロはパリではマキシム（Maxim）で女たちと酒浸りの生活を送っており、今更ハンナに結婚を申し込むのは遺産目当てのようで誇りが許さず、「マキシムに行くのが楽しい」と歌い登場、ハンナとやりとりしたあと二人は退場する（4）。ヴァレンシアンヌとカミーユが再び現れ、二人で寄り添って時を過ごそう、と歌う（5）。そこへ公使とダニロが現れ、公使はダニロにハンナと結婚するように言う。ダニロは断るが、公使は、もしハンナがパリ男と結婚すると遺産の大金が祖国から失われる、とダニロにハンナとの結婚を強要する。そこへハンナが現れ、パリの伊達男3人も登場、3人は花婿候補として自薦するが、ハンナは適当にあしらう。ダニロとハンナは意地を張り合うが、有名なワルツの調べに乗って2人は踊る（6）。



図5. 「陽気な未亡人」の3：50シリング切手。

### 「第2幕」

ハンナの邸宅に一同招待され、ハンナは歓迎の言葉を述べ、有名な「ヴィリアの歌」を歌う（7, 図6）。

Es lebt' eine Vilja, ein Waldmägdelein,  
ein Jäger ershaut sie im Felsengestein.

Denn Burschen, dem wurde so eigen zu Sinn,  
er schaute und schaut' auf das Waldmägdelein hin.  
Und ein nie gekannter Schauer,  
fasst' den jungen Jägersmann sehnsuchtvoll  
fing er still zu seufzen an!

Vilja, oh Vilja, du Waldmägdelein?

fass' mich und lass' mich dein Trautliebster sein!

-----

昔あるところにヴィリアという森の  
妖精がおりました。  
一人の狩生度が岩山に彼女をみとめま  
した。  
その若者は不思議な魅力に魅せられ  
いつまでも彼女をみつめていました。  
生まれてはじめての身震いが若者を  
とらえ、苦しそうに彼はため息をつ  
きはじめました。  
ヴィリアよ、おおヴィリアよ、森の妖  
精よ！  
私を捕まえ、お前の恋人にしておくれ！

CHOR.  
Vil - ja, o Vil - ja, Du Wald - mied - lein, fass' mich und lass' mich Dein Traut - lieb - ster sein!  
Vil - ja, o Vil - ja, Du Wald - mied - lein, fass' mich und lass' mich Dein Traut - lieb - ster sein!

Sehr langsam.  
Hanna.  
Vil - ja, o Vil - ja, was thust Du mir an? Bang flieht ein lieb - kran - ker

1. Allegretto.  
Hann.  
Mann! 2. Das

D. 3366.

図6. 同上。ハンナの歌う“ヴィリアの歌”(曲番号7)。

ハンナとダニロは意地を張ってやりとりし、「馬鹿な騎士さん」と歌う(8)。次に男たちが登場し、女をどのように取り扱ったらよいか、女の研究は難しいと「女、女、…」を歌う(9)。ハンナとダニロがまだ意地を張り合い、ハンナはパリの生活を満喫したい、ダニロはマキシムを楽しみたい、と言うが、互いに惹かれ合っている(10)。他方、ヴァレンシアンヌはカミーユと別れる決心をし、「私は貞淑な人妻です」と書いた扇を彼に渡す。2人は最後の逢い引きをしようと、ロマンチックな2重唱を歌い、庭の四阿(あずまや)へ入る(11、図7)：

(Camille)

Zum Abschied, Du süsse, einen letzten Kuss! お別れに最後のキスを!

(Valencienne)

Doch nicht hier. でも、ここでは駄目!

(Camille)

Sieh dort den kleinen Pavillon, あそこに小さな四阿がある。

er kann höchst discret verschwiegen sein! あそこでは誰にも見つからない。

O, dieser kleine Pavillon plaudert nicht あの四阿は一言だって

ein Wörtchen aus, o nein! 喋りはしない。

Dunkel uns umgängt, nimm, 闇が私たちを包み、愛の欲するもの  
was Liebe uns schenkt! をとり給え!

Komm' in den kleinen Pavillon, あの小さな四阿へ行こう、

komm' zum süssen Rendezvous, o Du! 甘い逢い引きに行こうよ!

Val. stand ge-bracht.

Cam. Zum Ab-schied, Du Sü-sse, ei-nen letz-ten

80

Viol. Solo. Trombi con Sord. Harfe (glissando.) Viol. Corni.

rit. Doch nicht hier. *langsam*

85

pp *langsam*

Viol. Solo. Violinen. Corni.

90

*animato*

*pp animato*

D. 3364.

図7. 同上。ヴァレンシエンヌとカミーユの歌う最後の接吻の歌（曲番号11）。

この2重唱は誠に美しい。2人が四阿へ入るところを公使秘書官のニエグシュに見られる。そこへ公使が現れ、四阿を開けるようニエグシュに命ずるのでニエグシュは困って誤魔化そうとするが、鍵穴から中を覗いた公使は、女が妻のヴァレンシアンヌであると知る。ニエグシュは、そうではなく、中の女はハンナだという。その間に、ヴァレンシアンヌを助けようとして裏口からハンナがヴァレンシアンヌと入れ替わる。そこへダニロが現れ、四阿にカミーユといたハンナが彼と結婚すると聞き、絶望的になり、「昔あるところに王子と王女がいた」と歌う。ハンナはこれでダニロの自分に対する愛をはっきりと知る(12)。ヴィリアの曲で幕が下り(12a)、間奏曲が続く(12b)。

## 「第3幕」

ハンナの屋敷。踊りの音楽（13）。ヴァレンシアンヌや公使館の妻たちがマキシムのグリゼット（マキシムにいるカンカン踊りの踊り子）の扮装をして余興が始まり、フレンチカンカンを踊る（14）。ハンナとダニロの2人となり、ハンナは四阿の一件をダニロに説明する。了解したダニロはハンナに「パリ男と結婚することを禁止する」、と宣言し、愛を告白（14a）、ようやく素直になって「唇は黙り、ヴァイオリンはささやく、私を愛して」とワルツを踊る（15）（図8）：

Was bin ich? (Beide verstummen. Hanna blickt sinnend in die Ferne und setzt sich zum Tisch. Danilo kämpft mit seinen Gefühlen) Danilo.

Lip - pen schwei - gen, 's flü - stern Gei - gen: Hab' mich lieb! All' die Schrit - te sa - gen bit - te, hab' mich lieb! Je - der Druck der Hän - de deut - lich

D. 9366

図8. 同上。ハンナとダニロの二重唱“唇は閉じて”（曲番号15）。

Lippen schweigen, 's flüstern Geigen:

Hab' mich lieb!

All' die Schritte sagen bitte, hab' mich lieb!

Jeder Druck der Hände deutlich mir's beschrieb.

Er sagt klar 's ist wahr, 's ist wahr, du

唇は黙（もだ）し、ヴァイオリンは囁く

私を愛して下さいと！

すべてのステップの一つ一つが言っている

私を愛して、愛してと！

握る手と手からハッキリと私には感じられる。

あなたは私を愛している！

-----

公使のところへニエグシュが、四阿で扇を拾った、と持参する。それを見た公使は扇が妻のヴァレンシアンヌのものとなり、四阿の女を妻でなかったかと再び疑う。公使は妻と離婚し、自分がハンナと結婚したいと言う。すると、ハンナは、亡夫の遺言で、自分が再婚すると遺産をすべて失う、と説明する。これを聞いたダニロは、ハンナが無一文になるならハンナと結婚する、「君を愛している」と宣言する。すると、喜んだハンナは財産は夫のものになる、と言いい、2人の結婚によって故国は莫大な財産を失わないことになる。公使はまだ扇にこだわっているが、ヴァレンシアンヌは「私は貞淑な人妻です」と書いてあるから、よく読みなさい、と言う。一同は女を研究することは難しい、女たちは男たちを悩ませる、と歌い(16)、幕が下りる。

### 演奏

レハールの初期の作品であるにもかかわらず、大ヒットをした作品である。ウィーンでの上演回数も多いので、筆者のウィーン訪問の機会にこのオペレッタ上演に遭遇する確率も比較的高かった。表5、表6に示すように、1979年の自宅火災で多くの資料を失った以後、1982年以来、筆者がウィーンで「陽気な未亡人」を聴いたのは5回に及ぶ。また、来日公演で聴いたのは表6に示すように6回、そして所持する全曲レコードは4種類である(表7)。このオペレッタの初演が行われたアンデアウィーン劇場で聴いたのは1回で、他はすべてフォルクスオーパーで聴いた。また、大阪で上演された「陽気な未亡人」も大半は来日したフォルクスオーパーによる演奏であったが、変わったところではハンガリー・ブダペストの歌劇団によるものを2回聴いた。もともとレハールはハンガリー生まれ、ということで、たしかにブダペストでは人気がある。その点カールマンも同様である。まだ解放前の社会主義体制時代、ブダペストの人たちにレハール、カールマン、あるいはシュトラウスの、貴族や上流社会の話を取ったオペレッタが人気があるのは政治思想と矛盾するのではないか、と訊ねたことがある。彼らは、「それとは関係ない」と答えた。

表5. ウィーンで聴いた「陽気な未亡人」

日 時	1982	1989	1992	1994	1995
	8/23	9/9	10/22	9/2	9/22
指揮者	R.Biebl	K.Leitner	R.Biebl	F.Bauer-Theussl	R.Biebl
管弦楽	Th.an der Wien	Volksoper	Volksoper	Volksoper	Volksoper
配 役					
Baron Zeta:	R.Wasserlof	K.Ruzicka	K.Ruzicka	S.Nemeth	K.Ruzicka
Valencienne:	G. Ramm	E. Kales	M.Holliday	B.Steinberger	M.Dorak
Danilo:	M. Bakker	K.Schreibmayer	K.Schreibmayer	W.Glashof	A.Dallapozza
Hanna:	T. Lund	R.Blankenship	M.Irosch	G.Fontana	U.Steinsky
Camille:	I. Filipovic	B.Kobel	D. Kübler	L.Vincent	B.Kobel
Cascade:	A.Haselbacher	J.Luftensteiner	F.Wächter	J.Luftensteiner	F.Wächter
Brioche:	E.Seitter	J.Forstner	F.Jirsa	F.Jirsa	F.Jirsa



Konsul:	H. Tscheppe	P.Drahosch	A.Wendler	J.Rathke	C.Günther
Sylviane:	B. Danell	H.Kindler	H.Kindler	H.Kindler	L.Clemente
Kromow:	U.D.Kusdas	H.Ofner	H.Ofner	H.Ofner	A.Kainz
Olga:	N.B.von Trips	K.Kutschera	G.Juster	G.Kissler	G.Kissler
Njegus:	O. Kolmann	V.Vogel	O.Kolmann	R.Wasserlof	J.Forstner

表6. 日本(大阪)で演奏された「陽気な未亡人」(FH:大阪フェスティバルホール)

日時	1982	1985	1989	1993
	6・22	4/8	6/18	10/26
場所:	FH大阪	FH大阪	FH大阪	FH大阪
指揮者:	R.Biebl	R.Biebl	R.Biebl	R.Biebl
管弦楽:	Volksoper	Volksoper	Volksoper	Volksoper
配役				
Zeta:	H.Prikopa	R.Wasserlof	K.Dönch	P.Branoff
Valencienne:	M.Holliday	D. Koller	M.Holliday	M.Holliday
Danilo:	K. Hümer	H.Serafin	K.Schreibmayer	A.Dallapozza
Hanna:	M. Irosch	S.Martikke	R.Blankenship	E.Kales
Camille:	A.Dallapozza	R.Karczykowski	Zachos Terzakis	M.Thomsen
Cascada:	P.Drahosch	P.Drahosch	J.Luftensteiner	J.Luftensteiner
Brioche:	K.Ruzicka	K.Ruzicka	J.Forstner	J.Forstner
Konsul:	W.Kandutsch	H.Randers	K.Ruzicka	E.Lehmann
Sylviane:	S.Holzmayr	R.Krula	G.Juster	C.Helfricht
Kromow:	R.Granzer	R.Granzer	R.Wasserlof	A.Kainz
Olga:	G.Löwinger	C.Klein	G.Preger	J.Geister
Njegus:	R.Wasserlof	R.Wasserlof	H.Prikopa	R.Wasserlof

(続き)

日時	1996	1998
	1/7	1/13
場所	FH大阪	FH大阪
指揮者	M.Laszlo	R.Pal
管弦楽	Hunarian State Budapest	Hungarian State Budapest
配役		
Zeta:	K.Janos	P.Endre
Valencienna:	D.Judit	D.Judit
Danilo:	H.Frigyes	H.Frigyes

Hanna:	K.Zsuzsa	K.Zsuzsa
Camille:	D.Gabor	K.Istvan
Cascada:	K.Laszlo	B.Bodor
Brioche:	H.Miklos	B.Jozsef
Konsul:	G.Istvan	F.Andreas
Sylviane:	J.Hediko	T.Maria
Kromov:	B.Zoltan	V.Zoltan
Olga:	O.Marika	O.Marika
Nyegus:	A.Imre	S.Gabor

表7. 「陽気な未亡人」の全曲レコード

発行年	1982	1973	1978	1982
指揮者	H.Walberg	H.von Karajan	R.Stolz	R,Biebl
管弦楽	München Rundfunkorch.	Berlin Philhar- moniker	Berlin Sym- phoniker	Volksoper
配 役				
Zeta:	B. Kusch	Z.Kelermen	B.Kusch	H.Prikopa
Valencienne	H.Dönath	T.Stratas	D.Chryst	D.Koller
Danilo:	H.Prey	R.Kollo	R.Schock	P.Minich
Hanna	E.Moser	E.Harwood	M.Schramm	M.Irosch
Camille:	S.Jerusalem	W.Hollweg	J.J.Jennings	R.Karczykowski
Brioche]	F.Lenz	W.Krenn	K.Ruzicka	
Konsul			W.Kandusch	
Kromov			R.Granzer	
Njegus:	H.Sachtleben	K.Renar	F.Gruber	R.Wasserlof

このとき、日本公演のブダペスト歌劇の上演では、「ウィーンのおベレッタ女性歌手は声に重点を置き、容姿にはあまりこだわらない。しかし、ブダペストの女性歌手は声と容姿の両者を兼ね備えている」という自慢げな説明があった。たしかにハンナを歌ったスーサ (Zsuzsa) は妖艶であった。しかし、フォルクスオーパーの演奏はやはりすばらしい。もちろん筆者の好みが入るが、ウィーンや日本公演で聴いた限り、ハンナはイーロッシュがいいし、ダニロはシュライプマイヤーがいい。問題はヴァレンシアンヌであるが、第3幕でフレンチ・カンカンを踊るので、ホリデイが圧倒的に人気がある。たしかにアメリカ人にしては歌もなかなか上手だし、はじめバレーを勉強しただけあって踊りがうまい。カミーユはダラポツァが適役だろうし、3枚目のニエグシュがうまいのはワッサーローフである。筆者の印象では、ヴァレンシアンヌとカミーユの2重唱ではシュタインベルガーとヴィンセントあるいはホリデイとダラポツァが良かったし、ハンナとダニロの2重唱とワルツの踊りではイーロッシュとヒューマーが良かった。

レコードではステージでお目にかかれぬ大物を歌わせている。それは表6のキャストを見ただけであればすぐにわかるであろう（歌手の経歴等はこのシリーズの1, 2, 3をごらん頂きたい）。レコードではこれらの大物が歌うのは「こうもり」など他のオペレッタでも同様で、その意味ではステージでは味わえない、いわば想像の世界でそれぞれのオペレッタを楽しむことができる。

この「陽気な未亡人」の“クローン”オペレッタのような「ルクセンブルク伯爵」が続いて作曲された。筆者は実は「ルクセンブルク伯爵」を舞台で観たことはないが、音楽を聴く限り、なじみ深い曲が豊富で、大変楽しめる。将来舞台で味わいたいオペレッタの一つである。しかし、本稿ではむしろレハールの後期の作品で、上演頻度の高い、そして筆者がウィーンの舞台で数回聴いた「微笑みの國」について先に論じたい。

## B. 「微笑みの國」

表8. 「微笑みの國」登場人物

登場人物	和 文
Graf Ferdinand von Ludwig Herzer	中将フェルディナント・リヒテンフェルス伯爵
Lisa, seine Tochter	その娘リーザ
Graf Gustav von Pottenstein	竜騎兵中尉グスタフ・フォン・ポッテンシュタイン伯爵
Prinz Sou-Chong	スー・チョン殿下
Mi, seine Schwester	その妹ミー
Tschang, Oheim Sou-Chongs	スー・チョンの伯父チャン

異国的な雰囲気が良いのか、「微笑みの國」はフォルクスオーパーにおける「銀の時代」のオペレッタ上演では第4位に位置するが（表1）、「陽気な未亡人」がレハールの初期の作品であるのに対し、「微笑みの國」はその晩年の作品である（表2）。筆者の知る限り、このオペレッタが日本で上演されたことは聞いたことがない。このオペレッタは、いかにも後期のレハール作品らしく“喜”歌劇でなく、むしろ“悲歌劇”と言える作品である。ウィーンでは現在でも比較的によく演奏されるので、筆者はフォルクスオーパーで4回も「微笑みの國」を聴いた。

このオペレッタのストーリーは1912年のことで、それは1911年辛亥革命の翌年、清朝が滅びた年にあたる。このオペレッタは、この時期の中国、すなわち清朝末期の話を取り扱った、いわばエキゾチックな内容であるが、なぜこのオペレッタがフォルクスオーパーで人気があるのかはよく判らない。ヨーロッパ人の東洋趣味であろうか。もともと「黄色いヤッケ」として1923年2月9日、ウィーンで初演されたが成功せず、改訂されたのち「微笑みの國」として1929年、ベルリンで初演され、大好評を博し、以後ウィーンをはじめヨーロッパ各地で演奏されるようになったという（渡辺忠雄、1990）（図9）。

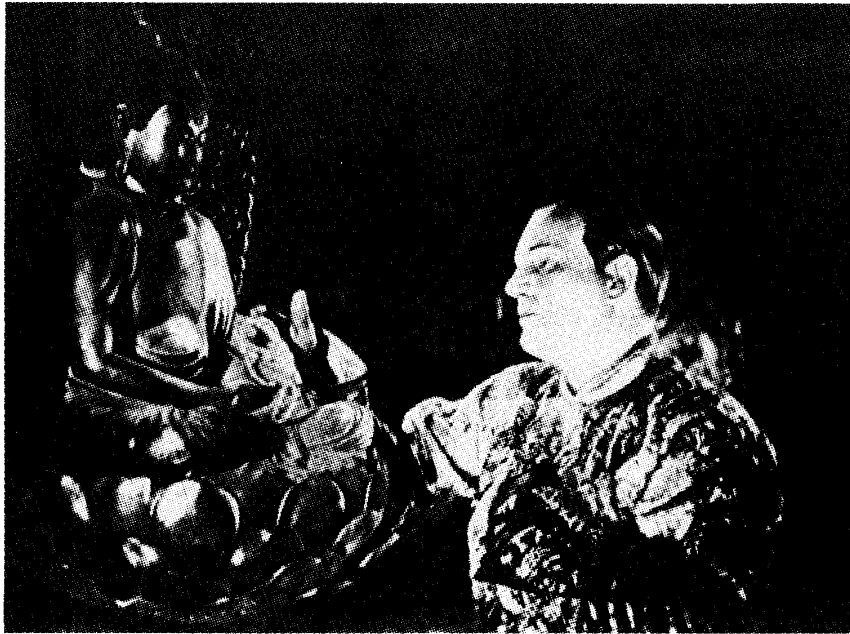


図9. 「微笑みの國」でスー・チョンを演じるリチャルト・タウバー（1931）  
（フォルクスオーバーのプログラムから）。

#### {中国の歴史と辛亥革命}

4000年の歴史を誇る中国も列強に侵略され、1894-95年の日清戦争に敗れた清国は西太后の支配下であり、清朝の圧制に対し義和団事件など、反清朝の武装蜂起が起こり、辛亥の年〔1911〕10月革命となった。翌1912年、清朝最後の皇帝溥儀（フギ）が退位し、中華民国が成立、孫文が臨時大統領となった。ついで袁世凱が臨時大統領に就任したが、袁は軍事力を背景に独裁の傾向を強めたため、革命派の指導の下に第二革命が起こり、中国は軍閥混戦時代へと移っていった。ここで後に頭角を現したのが蒋介石であった。「微笑みの國」のストーリーはこの清朝滅亡の時を忠実に取り入れたというより、政変のおこった清朝末期の東洋を一種のエキゾチズムから話に取り入れたのであろう。この最後の皇帝溥儀はラストエンペラー（Last Emperor）として映画などでも知られるが、のちに清朝を復易したという形で満州国皇帝となった。

辛亥革命の数年前、ウィーンの清国大使館に非常に魅力的な外交官がおり、レハールなどとも交際があったという（渡辺忠雄、1990）。清朝の崩壊直前、この外交官は本国に召還され、その後消息不明となったが、この外交官が「微笑みの國」のスー・チョン殿下の原型といわれる。スー・チョンは保柳健氏によれば漢字では「蘇城」と書かれたという（同上）。

#### {ストーリーと音楽}

このオペレッタの登場人物は表8のとおりであるが、オペレッタのストーリーはピアノ・スコア（Glocken Verlag, 1929/1957）に基づく曲番号（表9）に従い、文献を参考にして考察したい（EMI Record, 1967; Schneidererit, 1981; Würz, 1978; 西澤龍生・渡辺忠雄、1976; 寺崎裕則、1983）。

表9. 「微笑みの國」の曲番号（ピアノ・スコアによる）

## 1 Akt

1. Introduction und Entree (Lisa, Gustl, Chor) Hoch soll sie leben
- 1 1/2. Liedchen (Lisa) Ah, ah----
2. Freunderl, mach' dir nichts draus (Lisa, Gustl) Es ist nicht das erstenmal
3. Immer nur Lächeln (Entree des Sou-Chong) Ich trete ins Zimmer
4. Bei einem Tee a deux (Lisa, Sou-Chong) Ach, trinken Sie vielleicht
5. Von Apfelblüten einen Kranz (Sou-Chon) von Apfelblüten
6. I. Finale (Lisa, Sou-Chon) Wir sind allein

## 2 Akt

7. Vorspiel
- 7 1/2. Introduction und Auftritt Sou-Chongs
8. Wer hat die Liebe uns ins Herz gesenkt (Lisa, Sou-Chong) Dich sehe ich
9. Im Salon zur blau'n Pagode (Mi) Im Salon zur blau'n Pagode
10. Meine Liebe, deine Liebe (Mi, Gustl) Als Gott die Welt erschuf
11. Dein ist mein ganzes Herz (Sou-Chong) Dein ist mein ganzes Herz
12. Ich möcht' wieder einmal die Heimat sehn (Lisa) Alles vorbei
- 12 1/2. Chinesischer Hochzeitszug (Lisa, Sou-Chong, usw.)
13. II. Finale (Lisa, Sou-Chong) Mit welchem Recht

## 3 Akt

14. Märchen vom Glück (Lisa und Sklavinnen)
15. Zig, zig zig (Mi und Gustl) Zig, zig, zig
- 15 1/2. Wie rasch verwelkte doch (Mi) Wie rasch verwelkte doch
16. III. Finale (Lisa, Sou-Chong, Gustl) Dieselbe Sonne

## Anhang

7. Vorspiel
- 7 1/2. Verleihung der gelben Jacke (Sou-Chong, Tschang und Chor) Dschin-thien
- 7 1/4. Abgang

---

レオン (Victor Leon) の原案、ヘルツァー (Ludwig Herzer) とローナー・ベータ (Frits Lohner-Beda) の台本によりレハールが作曲した3幕のオペレッタで、1929年10月10日、ベルリンのメトロポール劇場で初演され、大好評を博した。

短い序曲が終わると幕が上がる。

## 「第1幕」

辛亥革命で清朝が崩壊した1912年の北京と離れたヨーロッパ、ウィーンの陸軍中将リヒテンフェルス伯爵の邸が舞台である。伯爵の令嬢リーザが馬術大会で優勝したので、その祝賀会が行われている (1)。リーザの幼友達で、竜騎兵中尉のグスタフ・フォン・ポッテンシュタイン伯爵が竜騎兵連隊を代表して中將に祝辞を述べている。そこへリーザが現れ、馬術の次は「一生に一度の恋をしたい」と歌い、一同がそれに賛成する (1-1/2)。このリーザ出現の場の歌は (西澤龍生・渡辺忠雄訳注、1976) :

Flirten, bisschen flirten  
 Kann man zehnmal auf jedem Ball.  
 Liebe, meine Lieben,  
 Ja, das ist ein ganz anderer Fall.  
 Bisschen kokettieren,  
 Auch, da kann man leicht riskieren,  
 Doch die Liebe kommt im Leben  
 Nur zum ersten- und letztenmal.  
 Gern, gern wär ich verliebt,  
 Wenn's einen gibt,  
 Der mich so liebt,  
 Wie mein Herz sich wahre Liebe denkt,  
 Wenn's Liebe nimmt  
 Und Liebe schenkt!  
 Gern, gern waer' ich vernarrt!

男といちゃつくことぐらい  
 舞踏会のたびにできるけど、  
 恋することは、ねえ皆さん、  
 これは全く別なものよ。  
 ちょいと男の気を引くくらい、  
 これは何でもないけれど、  
 恋をするのは生涯で  
 最初で最後の一度だけ、  
 私の心が愛を受け、  
 かつ又愛を捧げると  
 誠の愛を思うように、  
 私を愛する好ましい人が  
 いるなら忘れてなくなっちゃうわ。  
 すてきな男がでてくれば  
 大喜びで惚れちゃうわ。

彼女は中国の王子スー・チョンを思い出し、ピアノで東洋風の曲を弾く。グスタフが現れ、リーザと結婚する予定で陸軍省に手続きをした、と言うのでリーザは驚き、「あなたとは子供の時からのお友達、結婚とは別」とグスタフに謝る(2)。そこへスー・チョンが訪ねてくる。邸の広間に自分が贈った仏像だけが置いてあるのを見、「どんなに苦しいときでも、悲しいときでも、いつも微笑みを浮かべている」と歌う(3)：

Ich trete ins Zimmer, von Sehnsucht durchbebt.	あこがれに胸ときめかせせ部屋に入る
Das ist der heilige Raum,	それは聖なる場所なのだ。
In dem sie atmet, in dem sie lebt,	あの人呼吸し、住むところ
Sie, meine Sonne, mein Traum!	私の太陽、私の夢なるあの人、
Oh, klopfe nicht so stürmisch du zitterndes Herz!	おお、震える心よ、そんなに鼓動し
Ich hab' dich das Schweigen gelehrt.	ないでおくれ、黙っていると云ったろう。
Was weiss sie von mir, von all meinem Schmerz	あの人に何が判ろう、私のことが、
Und der Sehnsucht, die mich verseht?	私の苦しみ、身をやせ細らせる
Doch wenn uns Chinesen das Herz auch bricht,	この恋しさが、私たち中国人が
Wenn geht das was an? Wir zeigen es nicht.	心張り裂けようと

そこへリーザが現れ、二人はジャスミン茶を飲みながら、「二人でお茶を飲みながら語りましょう」と二重唱を歌う(4)。

(Lisa) Ach, trinken Sie vielleicht mit mir ein Tässchen Tee?	お茶をご一緒に頂きましょう
Sie fühlen sich dann wie zu Haus' in meiner Näh'	私のそばでくつろげますわよ
(Prinz) Ich bin entzückt, ich bin beglückt, wenn ich Sie seh',	あなたを見ると夢中になって
Und besser schmeckt mir noch als	幸せ一杯になるのです
Sekt das Tässchen Tee.	それにシャンパンよりはお茶

(Lisa) In dem Aroma liegt der weiche Duft --  
 (Prinz) Aus meinem Heimatland, so wunderbar -  
 (Lisa) Und mischt sich mit der lieben Wiener Luft --  
 (Prinz) Und mit dem süßen Hauch von Ihrem Haar.

の報が私の口にあうのです。  
 香りの中にはほんのりと  
 ただよっている故郷のにおい、  
 そして混じるのはウィーン  
 の空気  
 あなたの髪の毛の甘い香りも。

晚餐が終わり、広間に集まったウィーンの女性たちはみな東洋の王子に興味を示し、スー・チョンから話を聞こうとする。女性たちは、「中国ではどのようにして女性に愛を伝えるのですか」とスー・チョンに訊ねる。彼は、「四月に春が来るとリンゴの花で作った冠を月の光の注ぐ夜、恋人の窓辺に置き、愛する気持ちを歌う……」と歌い、一同をうっとりさせ（5、図10）。

**Nr. 5. Von Apfelblüten einen Kranz.**

◆ Sou-Chong: ...ist nur in eine andere Form gekleidet  
 ◆ Eine Dame: Bitte erzählen Sie...

**Lied.**  
(Sou-Chong)

*Allegretto (non troppo)*

Sou-Chong: Von Ap-fel-blü-ten ei-sen Kranz, ah

s. leg' ich der Lieb-li-chen vor's Fenster in ei-ner Mond-nacht im A-pril. Ah

s. Ein Lied werd' ich von bei-ßer Sehnsucht sin-ge-n und mei-ne

s. Lau-ja soll's Silber kin-gen in ei-ner Mond-nacht im A-pril. Ah

G. V. 111

図10. 同上。スー・チョンの歌う“リンゴの花”（曲番号5）。

そこへ清國公使館の書記官が来て、「殿下が総理大臣に任命されたので、明朝出発して帰国するよう」と本国からの指令を伝達する。このとき、リーザは「一度の人生に愛を捧げるのはこの人である」と悟る。しかし、スー・チョンは、風俗習慣も伝統も異なる東洋の國にウィーンの貴族令嬢が暮らせるだろうかと考え、淋しく微笑んで去ろうとする。しかしリーザは「あなたとなら世界の果てまでも」といい、スー・チョンの心も決まり、「リンゴの花の冠」を歌いながら二人はひしと抱き合う(6)。

### 「第2幕」

序奏の舞台は北京の王子宮殿(7)。王子の総理大臣就任のため、居並ぶ廷臣の前でスー・チョンは伯父のチャンから「黄色い上着」の授与式が行われている(71/2)。この式にはリーザは同席出来ず、彼女は不満だが、スー・チョンは「君は女王で、永遠の花だ」と言い、「愛の二重唱」を歌い、愛を確かめ合う(8、図11)：

② Valse boston  
Sou - Chong:

Wer hat die Lie-be uns ins Herz ge-senkt, uns den sü-Ben Ransch und den bit-ter-sü-ßen  
Schmerz ge-schenkt? Fiel ein goldner Stern hoch vom Himmels-zelt bei dem er-sien Knü-  
Wer hat die Lie-be dir ins Herz ge-legt, in dein bei-Bes auf die schö-ne Welt?  
Herz, daß es zür-tlich mir ent-ge-gen-schlägt?  
Aus dem Pa-ra-dies flog ein Traum uns zu,

G. V. 111

図11. 同上。スー・チョンの歌うワルツ(曲番号8)。



- (Prinz) Wer hat die Liebe uns ins Herz gesenkt, 誰が愛を埋めたのか  
 Uns den süßen Rausch 渡したちの心の中に  
 Und den bittersüßen Schmerz geschenkt? この甘美な陶酔を、苦い苦しみを  
 Viel ein sold'ner Stern 初めて口づけしたときに  
 Hoch vom Himmelszelt 夜空 かな高みより  
 Bei dem ersten Kuss 社交の場へと金の星が  
 Auf die schöne Welt? 天から降ってきたのかな。
- (Lisa) Wer hat die Liebe dir ins Herz gelegt, 誰が愛を横たえたの  
 In dein heisses Herz, あなたの心のその中に  
 Dass es zärtlich mir entgegenschlägt? 熱いあなたの心の中に
- (Prinz) Aus dem Paradies 天国から私に  
 Flog ein Traum mir zu ---- 夢が飛んできたのです
- (Lisa) Oh, Geliebter, du, ich weiss genau, ああ、いとしい方、  
 So verliebt wie ich ist keine Frau, 私ほど恋に夢中な女はいない  
 So liebt man ein einzigmal, 恋をするのはただ一度  
 Liebt man nur ein einzigmal, たった一度のことなのよ  
 Meine Liebe hüllt dich ein, 私の愛があなたを包む  
 Du bist mein und ich bin dein! あなたは私の物なのよ、私はあなたのものなのよ。

-----  
 スー・チョンの妹、可愛らしいミーがテニス姿で現れ、「サロンの中の青い塔」を歌い、兄からヨーロッパの話を聞いている彼女は、中国の古い習慣に疑問を抱いている (9)。リザに恋していたグスタフが大使館駐在武官として赴任し、愛らしいミーの魅力にとりつかれ、二人は「僕の愛は君の愛」と意気投合して歌う (10)：

- (Gustav) Als Gott die Welt erschuf, 神がこの世を作った時は  
 war'n alle Menschen gleich. 人間みんな平等だった、  
 Alle Blumen blühten dort 花はいずれも誰彼なしに  
 für uns sowie für euch みんなのために咲いていた、  
 Und es gab nicht weiss und gelb 白も、黒も、黄色も、  
 und schwarz und arm und reich. 金持ちも貧乏人もなかったのだ。
- (Mi) Jedoch im Lauf der Zeit ところが時の経つうちに  
 entschwand der schöne Brauch. よい習わしは消え失せました。
- (Gustav) Alle Menschen sind verschieden 人間みんなさまざままで  
 und die Sitten auch. 風俗とても同じこと。
- (Mi) Nur wenn uns're Herzen 私たちの心と心が  
 Sprechen zärtlich süß, やさしく話す時だけが  
 Ist es noch genau so 天国にいるみたいなのです。  
 Wie im Paradies.
-

スー・チョンがヨーロッパの女性を伴って以来、この國が西欧化することを懸念する伯父のチャンは、スー・チョンに4人の妻を持たせ、リーザを帰国させようと計る。その式の日、やむなくしきたりに従うスー・チョンはリーザに“この結婚は形式だけ、私の愛はリーザ”と「君こそ我が心」と歌う（11）。この結婚でスー・チョンが4人の妻を持てば白人のリーザは宮中での地位を失う、と伯父チャンがリーザに告げる。怒りと屈辱を耐えられないリーザにグスタフは帰国をすすめ、リーザはウィーンに思いを馳せ「もう一度故郷を見たい」と歌う（12）：

Ich möcht' wieder einmal die Heimat seh'n,	ふるさとを今一度、
Das Haus, die alten Bäume,	家や老樹を見てみたい、
Möcht' durch den stillen Garten geh'n	夢に憧れた我が町の、静かな庭を歩きたい、
in der Stadt meiner Sehnsuchtträume!	
Ich möcht' wieder fühlen der Heimat Duft	嗅いでみたい今一度、
Dort fern überm leuchtenden Meer!	輝く海のはるか彼方で
Ich möcht' wieder atmen Wiener Luft!	ふるさとのあの香りを、
Das Heimweh quält mich so sehr!	ウィーンの空気を今一度・・・

結婚式（12-1/2）のあと、そこへ現れたスー・チョンはリーザが帰国することを絶対に認めない、と言い、宦官に命じてリーザを閉じこめさせる。リーザと國の習慣の板挟みになったスー・チョンは切々と「君こそ私の心のすべてだった」と嘆き歌う（13）。

### 「第3幕」

幸せはおとぎ話だったと嘆くリーザ（14）。監禁されているリーザを逃走させるため、グスタフと妹のミーが宮殿に来る。二人はツイク、ツイクと二重唱を歌う（15）：

(Mi)

Zig, zig, zig, zig, ih!	白河の川辺に菊の花が
Ih! Ih! Ih!	咲き誇る季節になると、
Wenn die Chrysanthemen blüh'n am Paiho,	幾千人の乙女らが
Wenn der helle Vollmond lacht am Paiho,	明るい十五夜お月さま
Pflücken sie der Blüten Pracht in der Nacht,	夜の夜中に見事な花を摘むのです
Willst du nicht das Märchen sehen,	おとぎの國を見たくはないの

ミーはリーザとグスタフの脱出を助けようとするが（151/2）、そこへスー・チョンが現れ、立ちふさがる。二人は「自由にさせて・・・」と歌い、スー・チョンに哀願する。事態を見て諦めたスー・チョンは初めてリーザと心が通った「リンゴの花で冠を」を歌い、グスタフに「私の宝リーザを無事に故郷へ届けて」と頼む。リーザはスー・チョンとミーを抱き、感謝してグスタフと去る（16）。リーザを失ったスー・チャンは、グスタフと別れた妹ミーに「苦しくても泣いてはいけない。それが仏様の教えだ。どんなに悲しくても口元に微笑をたたえていよう」と歌う（Anhang 7 1/2, 1/4）：

Liebes Schwesterlein	かわいい私の妹よ
Sollst nicht traurig sein, wenn dein Schmerz dich auch versehrt.	やせ細るほど苦しくても悲しんではいけないよ。
Schau' mein Gesicht, ich weine nicht.	私の顔を見てごらん
So hat es Buddha gelehrt.	泣いてなんかいないだろう。
Liebes Schwesterlein.	かわいい私の妹を
Lass sie glücklich sein.	どうか幸せにしておくれ、
Sie vesteh'n nicht unser Herz.	ぼくらの心は彼らには判りっこない
Lass uns zu zweit tragen das leid,	ぼくら二人で悲しもう、
Tragen in Demut den Schmerz!	ぼくら二人でつつましく苦しみを耐え忍ぼう

-----  
{演奏}

フォルクスオーパで3回「微笑みの國」を聴いたが、それらのキャストは表10のとおりであった。また、全曲レコードのキャストも表10に記しておく。

表10. フォルクスオーパーにおける「微笑みの國」とレコードの歌手キャスト

日 時	1986/9/8	1987/6/13	1992/10/23
指揮者	Franz Bauer-Theussl	Rudolf Biebl	J.P. Rouchon
オーケストラ	Volksoper	Volksoper	Volksoper
Graf Lichtenfels	Rudolf Wasserlof	Rudolf Wasserlof	Rudolf Wasserlof
Lisa	Marit Sauramo a.G.	Mirjana Irosch	Ulrike Steinsky
Prinz Sou-Chong	Otoniel Gonzaga	Laurenz Vinzent	Otoniel Gonzaga
Gustav	Heinz Ehrenfreund	Heinz Ehrenfreund	Josef Luftensteiner
Mi	Helga Graczoll	Helga Graczoll	Yvete Tonnenberg
Tschang	Jens Rathke	Hans Kraemmer	Helmut Ofner

表10. (続き)

1994/9/5	レコード	
Alfred Eschwe	指揮者	Willy Mattes
Volksoper	オーケストラ	Symhonie-Orch. Graunke
Kurt Ruzicka	Lisa	Annelise Rothenberger
Silvana Dussmann	Prinz Sou-Chong	Nicolai Gedda
Kawrebce Vincent	Gustav	Harry Friedauer
Josef Luftensteiner	Mi	Renate Holm
Martina Dorák	Tshang	Jobst Möller
Klaus Ofezarek		

1986年9月8日に行ったフォルクスオーパーの演奏について筆者の旅日記：

“Sou-Chong のOtoniel Gonzagaは抜群にいい声だ。何国人か不明。日本人にも見える。”

とある。また、1987年6月13日の旅日記：

“WürzburgからFrankfurtへ、WienのSchwechertへ約45分遅れ。空港にErichとElisabeth が出迎え、Volksoperへ直行。19：30で第1幕始まっていたが中に入れてくれる。“Das Land des Lächeln”だ。M. Irosch が Lisaで良かった。”

さらに1992年10月23日の旅日記：

“第列目、10、11という真正面の良い席だ。近くで迫力あり。比國人(?)のSou-chongはうまい。”

とゴンツァーガの声が印象に残っている。1994年9月5日の旅日記：

“Lisaの Dussmannはためだがいい声だ。 Sou-Chongの Vincentも3日\*に比べると大変良かった。伯父役の Ofezarekは抜群にいいバスの声だった。2. 5時間とやや短いオペレッタ「微笑みの國」だったが思った以上に良かった。”

プッチーニの「マダムバタフライ」も同様であるが、この「微笑みの國」も筆者の観たかぎり、第2幕の舞台装置や衣装は実際とは違うちぐはぐなものが多く、やはりヨーロッパ人の東洋趣味に過ぎないような印象をもった。

レコードは例によって豪華版で、劇場では実現しそうなキャストで、全員すばらしい歌を聴かせてくれる。

### C. 「ひばりの囀るところ」

ウィーンで筆者が聴いたレハールのオペレッタのうち、この「ヒバリの囀るところ」(Wo die Lerche singt) は少々特異な作品である。ほぼすべてのオペレッタを網羅していると考えられるシュナイダーライト(1981)の著書を含め、引用文献中にはこのオペレッタの項目はない。筆者も当日までこのオペレッタの存在すら知らず、何の予備知識もないままにライムント劇場へ赴いた。この1981年秋10月、ブルガリアのヴァルナ(Varna)で植物ホルモンに関するシンポジウムが開かれ、この会に招待されたのでソフィアからヴァルナへ飛び、黒海沿岸の会場で開かれた会議に出席した。シンポジウムのあと、ヴァルナからソフィアへ戻り、そこで2、3日間、聖堂やイコンを見て、ウィーンへ飛んだ。まずライムント劇場(Raimund-Theater)へ行き、さらに翌日、フォルクスオーパーでズッペの「美しきガラテ」、そしてさらに翌日ミレッカーの「ガスパローネ」を聴いた(増田芳雄、2000)。筆者が最初にライムント劇場でヨハン・シュトラウスの「ジプシー男爵」を観たのは1960年代であったが、1981年当時、まだ同劇場ではオペレッタが上演されていた。現在は閉鎖されているという。引用文献がなく、全曲レコードもないので、当日のライムント劇場プログラムにしたがってこのオペレッタについて概説したい。

---

\* 筆者註：9月3日には王宮 {Hofburg} の祝典ホール {Zeremoniensaal} でウィーン宮廷管弦楽団によるシュトラウスなどウィーン音楽の演奏会を聴き、ヴィンセントも歌った。

## 〔作曲と初演〕

1914年に第一次世界大戦が勃発したが、レハールは作曲を続け、いくつかのオペレッタを作曲し、主としてライムント劇場で上演したが、いずれも成功しなかった。たとえば“ドイツの兄弟よ、来たれ”（Komm, deutscher Bruder, 1914年10月）、“若きオーストリア・ハンガリーの誇り高き衛兵”（Jung-Österreich-Ungarns stolze Wacht, 1916）など。1917年6月、フランツ・マルトス博士（Franz Martos）はブダペストにいる古い友人のオットン・ターゲン（Otthon Tagen）を通じてレハールに問い合わせた：

“もう一度ハンガリーの人々に音楽を通じて祖国を思い出させることに時間を割いて下さいませんか？”

と。マルトスの案では、ハンガリーの広野（プスタ:Puszta）の黒い森を扱った“村と町”を主題にしたものであった。レハールはマルトスの構想を2、3ページ読むや、直ちに台本作家のウィルナー（A. M. Willner）とライヘルト（Heinz Reichert）に台本を作るよう依頼した。彼らは当時しばしば上演されていたビルヒ・パイファー（Charlotte Birch-Pfeiffer）の古い国民劇を取り入れた。この台本は良くできており、レハールはこの台本に従って作曲にかかったが、台本を読んだ最初の印象に基づく考えによってこのオペレッタの表題は「ひばりの囀るところ」とされた。それは二人の主役、祖父役のパルとその孫娘マルギットのうち、ひばりのようなマルギットからの発想であった。

こうしてオペレッタは完成したが（図12）、その初演はウィーンではなかった。当時、戦争で混乱したウィーンではゼネストの最中であった。そこで、1918年2月1日、つまりハンガリーで革命が起こる3、4年前、ブダペストの王立劇場（Königstheater）で、このオペレッタ

*Wahler aus: Wo die Lerche singt!*

Alle Rechte vorbehalten.

図12. 「ひばりの囀るところ」のレハール自筆の楽譜（ライムント劇場のプログラムから）。

はハンガリー語で初演された（図13）。初演は大成功であった。ドイツ語による初演は同1918年3月27日、ウィーンのアンデアウィーン劇場で作曲者レハールの指揮によって行われた。まだドイツ・オーストリアが連合国に降伏する前（11月に第一次世界大戦終結）のことであった。編んだ金髪のカルトウシュ（Louise Kartousch）と喜劇歌手で、ジラルディ（Alexander Girardi）\* ばりのタウテンハイン（Ernst Tautenhayn）の歌と演技は素晴らしかったという。

ジラルディは死んだが、オーストリアは死ななかった。「ひばりの囀るところ」は戦争による疲弊、ゼネストにもかかわらず、6週間連続公演を行い、生き残った。オーストリアはさらに半年生き続けたが、ドイツ皇帝は亡命、1916年に死去したオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフのあとを継いだカールはオーストリアを離れ、オーストリア・ハンガリー二重帝国\*\*は崩壊した。こうして、「ひばりが囀るところ」は帝国最後のオペレッタとなった。

\* 筆者註：ジラルディについて（渡辺 護：ウィーン音楽文化史、下、音楽の友社1989；シュピール、別宮貞徳訳：ウィーン、黄金の秋、原書房、1993）。オペレッタの名歌手、名優として一世を風靡したジラルディ（1850-1918）はグラーツの鏡前工の息子だったが、この仕事を嫌ってウィーンに赴き、小劇場で喜劇の役を歌った。その美しいテノールの声が目を集め、アンデアウィーン劇場へ出演することになった。まず、1881年、ヨハン・シュトラウスの「陽気な戦争」で喜劇役者の役を与えられることになっていたが、彼は自分がソロを歌う場面を入れて欲しいと劇場側に申し入れた。はじめシュトラウスは拒絶したが、代役がいないので、とうとう折れ、ずっと以前に作曲したワルツを彼に与えることにした。これをジラルディが巧みに歌ったので、大変な人気となり、初演の大成功はジラルディとシュトラウスに栄光を与えた。その後、ジラルディはミレッカーの「乞食学生」、シュトラウスの「ヴェネチアの一夜」などを歌い、ウィーンの小唄なども唄って人気を博した。現在で言えば、エリヒ・クンツ（Erich Kunz）のようなものだろうか。1891年、シュトラウスは彼宛に書いている：“すべての作品ばかりでなく、アンデアウィーン劇場の存在さえもあなたの肩にかかっているのです。この劇場のために作品を書くすべての作者たちが一生懸命になってあなたを頼りにしているのがおわかりでしょう。あなただけが存在か非存在かを決定することができるのです”と。シュトラウスのオペレッタは同時のウィーン人にとってはあまりに「音楽的」でありすぎ、気品がありすぎたが、これをジラルディが庶民にわかりやすくして歌ったという。シュトラウスもまた彼を得てからは、彼のために作曲することを忘れなかった。たとえば、「ジプシー男爵」の豚飼いチューバンの役はまったくジラルディのために、かれがこの役をあまりにうまく演じたので、その死後、暫くはこの役を演じようとする歌い手がいなかったほどであった。ジラルディは1918年、死の数ヶ月前にブルク劇場に移籍した。フォルクスオーパーやアンデアウィーン劇場の看板歌手・役者のほとんどが遅かれ早かれ王立劇場に引き抜かれることは今日も変わっていないという。

この「ひばりの囀るところ」ウィーン初演の頃、ウィーンに人々はジラルディの生命を危惧していた。彼はこの年、4月の第2週、かねてからの糖尿病のため、左脚に障害が出ており、脚を引きずっていた。その2日後、彼の左脚は切断しなくてはならなくなった。その後、肺の塞栓を併発し、24時間後にジラルディは世を去った。詩人マウルス・フォンタナ（Oskar Maurus Fontana）は“ジラルディとともにオーストリアも死んだ”と言った。

このシュトラウスに対するジラルディの関係は、レハールに対してはリヒャルト・タウバーがその役目を果たした。

\*\* 筆者註：オーストリー・ハンガリー二重帝国（Österreichisch-Ungarische Monarchie, 1867-1918）

ドイツ統一を目標として覇権を争ったオーストリア・ハプスブルク帝国とプロイセンは普墺戦争を起こし（1866）、オーストリアは敗れた。これにより、オーストリア帝国はハンガリーと二重帝国となり（1867）、普仏戦争に勝った（1871）プロイセンは全ドイツをへ統一し、ドイツ帝国（第二帝政）となったが、オーストリアはドイツ帝国に入らなかった。第1次世界大戦ではオーストリアはドイツとともに戦ったが、連合軍に敗れ（1914-1918）、オーストリア・ハンガリー二重帝国は崩壊、オーストリア共和国となった。このとき、ドイツ帝国も崩壊、ワイマール共和国となった。

BUDAPEST, 1. FEBRUAR 1918

Zum ersten Male:  
„A pacsirta“ (Die Lerche)  
von Franz Martos,  
Musik von Franz Lehár



KÖNIGSTHEATER

図13. 「ひばりの囀るところ」ブダペスト初演のポスター  
(ライムント劇場のプログラムから)。

#### {ストーリーと音楽}

表11に登場人物と、ライムント劇場におけるキャストを示す。フォルクスオーパーのなじみの深い歌手とは全く違う人たちで、実のところ筆者の印象に残る歌手はいなかった。

時は19から20世紀に変わる頃、舞台はハンガリー（当時はオーストリア・ハンガリー二重帝国）のブダペストと近郊の農村である。ブダペストの才能のある画家シャンドールは女友達のヴィルマと暮らしているが、ヴィルマのお陰でシャンドールはブダペストで流行人物画家の地位を保っている。彼は学校を出てからこの田舎の農村にやって来、そこで最初に才能を認められたのであった。ブダペストで個展を開くには彼の画は芸術的にまだ不十分であったので、シャンドールは田舎で画想を練ることに決める。新しい画題を探すうちにシャンドールはマルギットに会う。彼女は哲学的農夫のパルの孫娘であるが、シャンドールのモデルになる。マルギットは農夫の若者ピスタと婚約しているが、シャンドールに惹かれ、個展を開くため完成した画をもった彼について都会ブダペストへ行く。そして、マルギットの肖像画は第1位の賞を受ける。しかし、この大成功のあと、シャンドールとマルギットとの間柄は疎遠になりはじめ、彼女によって高められたシャンドールの芸術的創造性も次第に低下していく。

他方、ヴィルマはシャンドールにとって田舎の娘は彼の芸術的キャリアーを妨げる、そして彼は田舎より都会向きの人間である、と信じさせ、シャンドールはマルギットと別れてヴィルマの許へ帰る。祖父のパルは失恋に悲しむ孫娘に、都会と田舎の違いを埋めるのはむづかしいと説き、彼女も許婚者ピスタのもとへ帰る。

このように他愛のない話で、音楽も比較的平凡だったように記憶する。このオペレッタがなぜ大成功を博したのか、おそらく戦争によって困難な生活を強いられていたハンガリーやオーストリアの人たちにとっては、このような他愛のない話が救いになったのであろうか。しかし、現在ではほとんど上演されない珍しいオペレッタを経験したのは筆者にとっては幸運であった。

表11. 「ひばりの囁るところ」の登場人物とライムント劇場におけるキャスト。

登場人物	キャスト
(指揮者)	Christian Pollack
画家シャンドール	Sandor Zapolja Curt Malm
その女友達ヴィルマ	Vilma Garamy Anna Maike Esdelsen
農夫パル	Torok Pal Hans Fretzer
その孫娘マルギット	Margit Beatrice Pavlik
農民の若者ピスタ	Bodrogi Pista Michael Gutstein

## D. その他のオペレッタ

筆者は上記3つのオペレッタ以外にはレハールのものを舞台で聴いたことがない。わずかにいくつかの全曲レコードやテープを所持しているだけである。それらは、作曲順に並べると、「ルクセンブルク伯爵」(Der Graf von Luxemburg)、「ジプシーの恋」(Zigeunerliebe)、「パガニーニ」(Paganini)、「ロシアの皇太子」(Der Zarewitsch) それに「ジューディッタ」(Giuditta)である(表1参照)。ゲーテの恋人を扱った「フリーデリケ」(Friederike)などにも興味はあるが、アリアがCDなどに納められているだけで、全曲を聴くことは出来ない。

## D-1. ルクセンブルク伯爵

実際の舞台を筆者は観たことはないが、筆者の印象ではこのオペレッタは「陽気な未亡人」の姉妹編、あるいはクローンのようである。登場人物もほぼ対比できる。主人公のルネ伯爵は「陽気な未亡人」の主人公ダニロに対応すると考えられ、舞台がパリであることからこの2つのオペレッタに共通性がある。また、このオペレッタもやはり「陽気な未亡人」のように美しい、なじみの深い音楽に満ち、それらは相互によく似ている。このオペレッタはウィルナー(A. M. Willner)とボダンツキー(Robert Bodanzky)の台本によっており、1909年11月12日、アンデアウィーン劇場で初演された。登場人物と全曲レコードのキャストを表12に示す。また、ピアノ・ヴォーカルスコアによるこのオペレッタの曲番号を表13に示す。

表12. 「ルクセンブルク伯爵」の登場人物と全曲レコードのキャスト

指揮者	Willy Mattes
オーケストラ	Das Symphonie-Orchester Graunke
René, Graf von Luxemburg	Nicolai Gedda
Fürst Basil Basilowitsch	Kurt Böhme
Gräfin Stasa Kokozow	Gisela Litz
Armand Brissard, Maler	Willi Brokmeier
Angele Didier, Sängerin an der grossen Oper in Paris	Lucia Popp
Juliette Vermont	Renate Holm
Sergei Mentschikoff, Notar	Hans Günther Grimm
Pawel von Pawlowitsch russischer Botschaftsrat	Willi Brokmeier
Pelegrin, Munizipalbeamter	Wolfgang Anheisser
Manager des Grand Hotel	Hans Günther



表13. 「ルクセンブルク伯爵」の曲番号（ピアノ・ヴォーカルスコア、Glocken Verlag）

## 1. Akt

1. Introduction, Entree Luxemburg, Ballett-Faschingsmarsch (Rene, Juliette, Brissard, Chor)
2. Boheme-Duett (Juliette, Brissard)
3. Chanson (Juliette, Chor)
- 3-1/2. Bühnenmusik (Strassenmusikanten)
4. Reminiszenz (René, Chor)
- 4-1/2. Bühnenmusik (René, Chor, Strassenmusikanten)
5. Lied (Basil, Pawlowitsch, Mentschikoff, Pelegrin)
6. Quintett (René, Basil, Pawlowitsch, Mentschikoff, Pelegrin)
7. Entree (Angele)
8. Finale I (Juliette, Angele, Brissard, René, Basil, Pawlowitsch, Mentschikoff, Pelegrin, Chor)

## 2. Akt

9. Introduction und Lied (Angele, Ensemble)
- 9-1/2. Bühnenmusik (Polka française)
10. Polka Mazurka I (Auftritt der Gesellschaft)
11. Duett (Angele, René)
12. Duett (Juliette, Brissard)
13. Terzett (Angele, René, Basil)
14. Trefle incarnat (René)
15. Polka Mazurka II (Auftritt der Gesellschaft)
16. Polkatänzer-Duett (Juliette, Basil, Ballett)
17. Finale II (Angele, Juliette, Brissard, René, Basil und Chor)

## 3. Akt

18. Introduction (Ballett und Auftritt Kokorow)
19. Couplet (Kokorow)
- 19-1/2. Reminiszenz-Duett (Juliette, Brissard)
20. Marsch-Terzett (Juliette, Brissard, Basil)
21. Duett (Angele, René)
22. Finale III (Angele, René, Juliette, Brissard, Anatol Saville und seine Kollegen, Basil, Kokozow, Chor, Ballett, Hotelpersonal)

{ストーリー}

「第1幕」

ルクセンブルク伯爵ルネに率いられた男たちがカーニバルで賑あうパリの大通りを練り歩いている。さんざん金を使いながら、ルネは上機嫌である（1）。この音楽も「陽気な未亡人」のダニロの登場そっくりである。アパートの窓から、ルネの友人で画家のプリサールがその女友達のジュリエッタと大声で叫んでいる。ジュリエッタは群衆の中に彼女の女友達で、有名なロシアのオペラ歌手アンジェルを見つけたからである。アンジェルはもうかなりの年齢のバジル・バジロヴィッチ公にくっついている。公はアンジェルに夢中で、彼女と結婚しようと考えている。画家のプリサールはアンジェルたちのことには関心がなく、自分の女友達ジュリエッタをモデルにしてヴィーナスを描きたいと願っている。ジュリエッタは“まず結婚、そしてモデルになる”とプリサールに要求している（2、レコードでは2-1/2は省略）。そしてジュリエッタは皆のためにシャンソンを歌う（3、3-1/2もレコードでは省略）。このワルツは美しく、よく知られるメロディーである：

Dem doppelt schmeckts dem Bübchen,	何と可愛い坊やよ、
wenn selber Du kaufst ein, und was	お前なら何を買っても、何を持ってきても
Du bringst, mein Liebchen,	いいのよ、愛する坊やよ。
wird mir will kommen sein.	
Ich hab' Dich gern zum Fressen,	お前は取って食べたいほど可愛い。
doch bitte ich Dich sehr,	だからお前に頼むのよ、
Du darfst mir nicht vergessen,	私のことを忘れないように、
aus Beste, ans Dessert!	どんなことがあっても！

そこへルクセンブルク伯爵ルネが現れる。ロシアの弁護士メンチコフと市の役人ペレグリンが現れ、ルネに話したいことがあるという（4、4-1/2も省略）。すなわち、アンジェルは貴族でなく、庶民なので、ロシア貴族のバジル・バジロヴィッチ公と彼女は結婚できない、という。それ故、彼女はまずこの地の誰か貴族と結婚して貴族の身分を取り、その上でバジルと結婚したいという。バジルはこのことを望んでいるが、はじめの結婚は形式だけに止めなくてはならない。そして、3ヶ月後には離婚しなくてはならない。バジルとも相談し、その結婚相手にルネに白羽の矢が立つ（5）。礼金50万フランという条件は、金のないルネには抵抗しがたいもので、ルネはこれを引き受ける（6）。ルネは結婚式が済み次第パリから消え、3ヶ月後に帰って離婚することになった。しかし、嫉妬深いバジルはルネに彼女の顔を見られないよう結婚式を挙げるようにする。アンジェルが画家のアトリエに現れ、画の両側に花嫁と花婿（ルネ）が互いに顔を見ないように立ち、結婚指輪を交換する（7、図14）。これは美しいマズルカである：

Unbekannt, deshalb nicht minder interessant ist 何も知らない、だから神聖な結婚生活  
 mir der heilige Ehestand, には興味がない、  
 je nun, ich nehme's nicht gar so schwer, 何も真面目に考えなくてもいい、  
 in diesem Fall ist's kein Malheur, だから不安でもない、  
 dies Ehejoch, es drückt nicht sehr! 結婚による束縛もない！  
 Liebe? Nie kam sie mir noch nah! Liebe? 愛？ 私には無縁だ！

50

*Tempo di Mazurka. (con brio)*

A. wird mir gar am End' noch ban - ge! Un - be - kannt, des - halb nicht min - der in - tres - sant  
 ist mir der heil' - ge E - - he - - stand, je nun, ich nehme's nicht  
 gar so schwer; in die - sem Fall ist's kein Mal - heur, dies E - he - joch, es drückt nicht  
 sehr! Lie - - he? Nie kam sie mir noch nah!

*a tempo* *rit.* *pp a tempo* *rit.* *a tempo* *f* *mf rit.* *p a tempo*

Kl. Glocke Str. Hfe. Vl. 1. Fg. Str. Ob. Kl. Fg. Hr. Trpt. Str. Vo. h

図14. 「ルクセンブルク伯爵」でアンジェルの歌うマズルカ（曲番号7）。



Valse moderato.

R. E - he, wunder - bar. Sie geht links, er geht rechts, Mann und Frau, Je - der mächts, Je - al ist solche

Angé. a tempo

R. Er geht rechts, sie geht links, das ist prak - tisch al - ler - dings, E - he, schmerz - los, oh - ne Je - des We - he!

G. V. 70

Valse moderato. (nachdenklich, für sich.)

A. (Wie von einer monotonen Eingebung erfasst, betrachtet Jeder seinen Ehering, und wird sich plötzlich des Ernstes der Situation bewußt, ihre Hände suchen und finden sich am Rande des Paravents.) Bist Du's (nachdenklich, für sich.)

R. Bist Du's

A. la - chen - des Glück, das jetzt vor - ü - ber schwebt? Ist das der sü - ße,

R. la - chen - des Glück, das jetzt vor - ü - ber schwebt? Ist das der sü - ße,

A. gol - di - ge Traum, den man nur ein - mal lebt? Sagt nicht

R. gol - di - ge Traum, den man nur ein - mal lebt? Sagt nicht

G. V. 70

図15. 同上。ルネとアンジェルの歌うワルツ (曲番号8)。



図16. 同上。ルネとアンジェルの仮の結婚の場面 (EMIレコードから)。  
ルネはニコライ・ゲッダ、アンジェレはルチア・ポップ。

Valse, quasi Allegretto.

A. Soll ich? Soll ich nicht? Nein, nein, nein, nein, mein Gott, ich darf ja nicht, und doch, der Teufel spricht: Schau, kurz ist der ach-ne Mal, und dann ist vor-bei, vor-bei! Sag' ich, sag' ich ja.

ist mir das höchste Glück so nah, laßt mich

Grave. An die Angèle Didier, die liebenswürdigste aller Hausfrauen, wird bald wieder vor Ihnen erscheinen!... Auf Wiedersehen!

G. V. 70

図17. 同上。ルネの歌うワルツ (曲番号9)。

しかし、アンジェルは金のために自分と名目上の結婚をした男を軽蔑するという。ルネは自分がその名目上の夫である、とアンジェルに告げて立ち去ろうとする。アンジェルは一瞬驚くが、彼女もルネを愛していることを自覚し、すぐにルネを追いかけ、“私はまだあなたの妻だ” (Noch bin ich Ihre Frau!) と叫ぶ (フィナーレ、17)。

### 「第3幕」

同じ夜、パリのホテルのロビー (18)。ロシアから伯爵夫人スターザ・ココゾフがやって来る。それは、彼女がバジル公との3年来の結婚の約束を果たすためであった (19)。彼女は、公がアンジェルと結婚することなどももちろん知らない。ブラッシールとジュリエッタも他の人々とやってくる (19-1/2)。そこへバジルもルネのことを怒りながらやって来、ジュリエッタたちと話す (20)。その時、電報が届き、ロシアで差し押さえされていたルネの財産が解除されたという知らせが来る。ルネはバジルに50万フランを返し、晴れてアンジェルと愛を確かめ (21)、ゴールインすることになる。こうしてバジルはスターザと、そしてジュリエッタはブラッシールと、3組がめでたく結ばれることになる (22)。

The image shows a musical score for a waltz titled "Valse moderato." by Engel. The score is written for voice and piano. It consists of three systems of music. The first system shows the vocal line and piano accompaniment with the lyrics: "Lie-ber Freund, no gehts uns mit den viel, nicht viel." The second system continues the vocal line and piano accompaniment with the lyrics: "Ster- nen! (mit einem Anflug von Resignation.) Die für uns in no- bel- haf- ten Per- nen." The third system shows the vocal line and piano accompaniment with the lyrics: "(zeigt sich zu ihm.) Für- che sehr, daß Sie umsonst sich mü- hen! (will sie umfassen) Ach, ich sch' sie glühn! Sie". The score is in G major and 3/4 time. The tempo is marked "Valse moderato." and the dynamics include "p" and "p".

g. v. 70

図18. 同上。アンジェルの歌うワルツ (曲番号11)。

例によってレコードでは、ルネ訳のゲッダとアンジェル役のローテンベ r ガーが素晴らしく、また脇役の歌手たちも一級である。

## D-2. ジプシーの恋

この「ルクセンブルク伯爵」の次に作曲されたのは「ジプシーの恋」(Zigeunerliebe)である。前作と同じウィルナー (A. M. Willner) とボダンツキー (Robert Bodanzky) の台本により、1910年、ウィーンで初演された。「ルクセンブルク伯爵」とはうって変わった”悲恋”物語である。筆者はこのオペレッタを舞台上で聴いたことはなく、また全曲レコードも持っていない。ただ、最近BSテレビで映画化されたこのオペレッタが放映されたが、それはグロッケン社 (Glocekn Verlag) のピアノ・ヴォーカルスコアには従っておらず、原作に忠実なオペレッタというよりは映画化されたオペレッタのようである。しかし、このテレビ・オペレッタでは歌手はなかなか立派で、オーケストラもハインツ・ワルベルク (Heinz Walberg) 指揮のミュンヘン放送管弦楽団である。主なキャストを括弧で示しながらこのオペレッタのあらましを以下に述べる (Würz, 1978)。人名のあとの括弧内は原綴りと、テレビ映画における配役の歌手名である。

<第1幕>19世紀初めのルーマニア・ハンガリー。ルーマニアの山岳地方で、地主貴族ドラゴティン (Dragotin: Heinz Friedrich) の娘ゾリカ (Zorika: Janet Perry) が水浴しているが、若いジプシーの楽士ヨーシ (Jozsi: Jon Bazea) と知り合う。二人は互いに好意を持つが、その日はゾリカの婚約発表式の日で、相手は貴族のヨーネル (Jonel: Adolf Dallapozza) である。ゾリカはヨーシにこの披露の式に来て音楽を演奏して欲しいと頼む。ゾリカはヨーネルを本当に愛しているのかどうか自分でも判っていないが、やもめの父ドラゴティンが、ブカレストの売春宿経営者で貴族未亡人のイローナ (Irona: Collet Roland) と再婚したいので、ゾリカに早く結婚して欲しいのだと疑っている。婚約の式が始まり、ゾリカに頼まれて、そこへ仲間とやってきたヨーシはハンガリー・ジプシー音楽を演奏する。ヨーシのヴァイオリンと楽隊のチンバロンが美しい。ゾリカはこのような今の生活が厭で、父の再婚も嫌い、ヨーシに遠くへ連れて行って欲しいと言い、2人は邸を出る。

<第2幕>ゾリカとヨーシのジプシー村での生活も2年経ち、彼らの愛は冷えている。ヨーシはジプシー女にもてはやされ、ゾリカは存在しないも同然である。ヨーシについてきたゾリカは愛を求めて歌う。この短調のワルツはこのオペレッタのなかでも美しく、よく知られている (スコア曲番号8, 図19):

Gib mir dort vom Himmelszeit alle Sterne der Welt,	あの蒼穹から私に全ての星をおくれ、
gib mir die Sonne, den Mond, meine liebe Dir's lohnt,	太陽を、月を、愛しいあなたの褒美と
	しておくれ、
gib mir alles dies in einem Kuss!	これらすべてを1回のくちづけで
Gib alle Blumen mir, gib in dem Hauch Deiner Lieb',	すべての花をおくれ、息吹の中にあ
	なたの愛を!
lieb' Dich dann, weil ich Dich lieben muss!	私はあなたを愛します!



ゾリカはここでははっきりと結婚式を皆の前で挙げるようヨーシに要求する。しかし、いよいよ式の日を迎えたとき、イローナの誘惑に負けたヨーシはゾリカを置いて去ってしまう。

<第3幕>ドラゴティンの邸ではかつての許婚者ヨーネルがゾリカの帰りを待っており、そこへ傷心のゾリカが帰ってくる。こうして彼女を愛し続けていたヨーネルとゾリカは結ばれる。

テレビ・オペレッタではゾリカとヨーシ、それにヨーネルがいい声を聴かせ、何と言ってもジプシー音楽がハンガリー・ルーマニア民族衣装とともに楽しませる。ハンガリー民族楽器にチンバロンをふんだんに聴かせるのがこのオペレッタの特徴であろうか。

レハールは彼の作品にどちらかというと感傷的な、喜劇的要素を好んだが、同時に民謡調を導入した。最初のオペラ、ククシュカ (Kukuschka) が1896年ライプチヒの劇場で成功した後、「陽気な未亡人」が空前の大ヒットをしたが、1910年にはこの「ジプシーの恋」(Zigeunerliebe) を初演し、これを自ら“ロマンティック・オペレッタ”(Romantische Operetta) と称した。これらの初期の作品ののち、1925年頃からレハールの作品はオーケストラレーションやハーモニーに優雅さを加え、円熟した作品を創り始めた。この「ジプシーの恋」は民族的要素を盛り込んだ初期作品の代表作品といえよう。

Valse moderato.

G. V. 140

図19. 「ジプシーの恋」でゾリカの歌う短調のワルツ (曲番号8)。

## D-3. パガニーニ

ジェノヴァ生まれのヴァイオリンの天才、作曲家ニコロ・パガニーニ (Nicolo Paganini, 1782-1840) を題材としたオペレッタである。ヴァイオリン協奏曲を4曲 (6曲ともいう)、奇想曲など、技巧を駆使した華麗なパガニーニの曲を聴くと、その天才性が心に伝わる。このような、いわゆる歴史オペレッタをレハールはこの「パガニーニ」のほか、ゲーテの恋人を扱った「フリーデリケ」を作曲している。

実は「パガニーニ」の台本は匿名でレハールに送られてきた。しかし、やがて送り主はウィーンの発行人クネプラー (Paul Knepler) であることがわかった (Schumann, 1925/36)。クネプラーはオペレッタが好きで、素人作曲家でもあった。このクネプラーのオペレッタははじめ「魔法の巨匠」(Hexenmeister) と名付けられていたが、これを台本作家イェンバッハ (Bela Jenbach) に正統な台本に書き換えて貰うより早く、わずか14ヶ月でレハールは作曲を完成した。さらにレハールは台本の一部を友人の歌手であるタウバー (Richard Tauber) に合うように書き換え、1925年10月30日、ウィーンのヨハン・シュトラウス劇場で作曲者自身の指揮によって初演した。大した成功ではなかったが、ドビッシーの伝記作家デツザイ (Ernst Decsey) だけは“レハール最高の傑作”と絶賛した。ベルリンにおける初演は1926年1月30日、ドイツ芸術家劇場 (Deutsches Künstlertheater) において、レハールの懇望によりタウバーが出演して行われた。3ヶ月間切符が売り切れるほどの人気であったという。

## |パガニーニ| (図20)

19世紀は3つの事件によって特徴づけられるといわれる。すなわち、第1はナポレオン戦争、第2は産業革命の掉尾ともいえる鉄道開通、そして第3はパガニーニの登場である。「悪魔のヴァイオリン」とも言われるこの鬼才の音楽は当時の人たちを狂気にさえたと言われる。パガニーニに関しては多く語られ、書かれているが、このオペレッタもその1つである。

11-14世紀に共和国としてヴェネチアと並んで海軍力を背景に栄光を誇ったイタリア半島



図20. パガニーニ像 (G. Kersting画から)。

北西部の町ジェノア（Genoa）の貧しいドック労働者の子としてパガニーニは生まれた。町のオーケストラの楽士にヴァイオリンの手ほどきをして貰い、作曲も少々学んだが、事実上彼の音楽は独学であった。19歳の時、ルッカ（Lucca）（図21\*）に新設された国立管弦楽団のヴァイオリン奏者に就職した。しかし、この小さな町の経済状態は思わしくなく、彼の職も不安定であった。折しも1805年、ナポレオンはルッカ公国の皇女に妹のエリザ（Elisa）を任命した。1806年、パガニーニはエリザ皇女の室内楽団における第2ヴァイオリン奏者を命じられた。彼は皇女と宮廷のお気に入りとなったが、1809年、たぶん皇女との意見の相違からこの職を退いた。しかし、パガニーニはのちにパリにも赴き、名声をほしいままにした。



図21 ルッカのドウオモ（筆者写す）。

### 「ストーリー」

パガニーニのルッカ時代の生活を題材にしたのがこのオペレッタである。あちこち旅をしながら演奏をし、早く名声を挙げたが、一人の未亡人と同棲した後、ルッカに赴き、ナポレオンの妹エリザ（Elisa, 1777-1820）と会う。彼女と別れた後、パガニーニはヨーロッパ各地で演奏活動を続け、その天才的な演奏で人々を魅了した。このオペレッタはパガニーニとこの女性とのロマンスを扱っている。筆者はこのオペレッタを舞台上で聴いたことはないが、全曲レコードを持っている。登場人物と全曲レコードのキャストは表14のとおりである。ピアノ・スコアの曲番号（表15）にしたがって以下に概説したい。

\* 筆者註：フィレンツェの西北、ピサの北に位置するルッカは古代ローマ帝国時代からの歴史をもち、中世の姿を残している。1119年、自治都市とななり、12-3世紀に経済的に栄えた。1369-1799年の間、共和国となったが、1805年、ナポレオンによってルッカ公国となった。ルッカはプッチーニ（Giacomo Puccini, 1858-1924）の生地としても知られる。

表14. 「パガニーニ」の登場人物と全曲レコードのキャスト

登場人物	キャスト
指揮者	Willi Boskovsky
管弦楽	Bayerisches Symphonie -Orchester
Anna Elisa, Fürstin von Lucca und Pionbino	Anneliese Rothenberger
Fürst Felice Bacchiocchi	Friedrich Lenz
Nicolo Paganini	Nicolai Gedda
Bartucci, sein Impresario	Horst Sachtleben
Graf Hedouville, General in Napoleons Diensten	Gerd W. Dieberits
Marchese Giacomo Pimpinelli, Kammerstcher der Fürstin	Heinz Zednik
Bella Giretti, Primadonna an der fürstlicher Oper zu Lucca	Olivera Miljakovic
Der bucklige Beppo	Benno Kusche
Ein fürstlicher Jäger	Rainer Jakob Wichartz
Solo Violine	Ulf Holscher, Ferenc Kiss

表15. 「パガニーニ」のピアノ・スコアによる曲番号

- 
1. Akt
    1. Violinsolo
      - 1a. Violinsolo
    2. L'empereur Napoleon (Anna Elisa) Mein lieber Freund, ich halte viel auf Etikette
      - 2a. Violinsolo
    3. Schönes Italien Lied (Paganini) Schönes Italien, erst gedenk' ich dein
    4. Was ich denke, was ich fühle (Anna Elisa, Paganini) So jung noch und schon ein grosser  
Meister
    5. So ein Mann ist eine Sünde wert (Anna Elisa) Feuersglut lodert heiss in meinem Blut
    6. Mit den Frau'n auf du und du (Bella, Pimpinelli) Niemals habe ich mich int'ressiert
    7. Finale I (Anna Elisa, Paganini, usw.) Die Fürstin Anna Elisa, des Reiches höchste Zier
  2. Akt
    8. Introdution (Bella Paganini, usw.) Wenn keine Liebe wär'
    9. Gern hab' ich die Frau'n geküsst (Paganini) Gern hab' ich die Frau'n geküsst
    10. Deinen süssen Rosenmund (Anna Elisa, Paganini) Deinen süssen Rosenmund
    11. Einmal möcht' ich was Närrisches tun (Bella, Paganini) Launisch sind alle Frau'n
    12. Niemand liebt dich so wie ich (Anna Elisa, Paganini) Sag' mir, wie viel süsse rote  
Lippen
    13. Liebe, du Himmel auf Erden (Anna Elisa) Ich kann es nicht fassen
    14. Finale II (Anna Elisa, Bella, Paganini, usw.) Was ist's, das unsern Sinn erregt
  3. Akt
    15. Oh, wie schön ist es, nichts zu tun (Chor) Liegen um Mitternacht alle Bürger

schnarchend im Schlaf

16. Wenn man das letzte Geld verlumpt (Paganini, usw.) Hat man den Kopf von Sorgen voll

17. Reminiszenz (Paganini) Meine Geige lieb' ich immer dar

18. Wir gehen ins Theater (Bella, Paganini) Jetzt beginnt ein neues Leben

19. Wer will heut' Nacht mein Liebster sein?(Anna Elisa) Wo meine Wiege stand

20. Finaletto (Anna Elisa, Paganini, Bartucci) Du darfst keiner Frau gehören

Violinsolo (auf der Bühne, hinter der Szene.)

*f tempo rubato* *rubato* *p*

Allegro non troppo. (♩ = 104)

*f a tempo* *rit.* *frit.* *p a tempo* *rit.*

Allegro moderato. (♩ = 84)

*a tempo* *stringendo* *rit.* *rit.* *a tempo* *rit.* *p a tempo* *string.* *rit.* *p a tempo* *rit.*

Allegro non troppo. (♩ = 104)

*a tempo* *rit.* *f a tempo* *p a tempo* *rit.* *rit.*

a. v. 50

図22. 「パガニーニ」導入部(曲番号1, 1a)のヴァイオリン独奏部。

## 「第1幕」

パガニーニを扱ったオペレッタらしく、まず華麗なヴァイオリンの響きから幕を開ける。このオペレッタのはじめと第2幕終わりに響くヴァイオリンの音色は、初のラジオ放送のさいレハールがボスコフスキーを指名して演奏したことは2で述べた。ルッカの近くの村カパンナリの居酒屋では村人たちがカード遊びをしている。隣のあずまやから突然ヴァイオリンの響きが聞こえる(1, 1a、図22)。村人はカード遊びを止め、通行人たちもその音色に聞き入る。興主のバルトゥッチが出てきて居酒屋の亭主にキャンティ・ワインを注文する。人々は彼にあのヴァイオリンは誰が弾いているのか、と訊く。バルトゥッチは「あれはニコロ・パガニーニだ」と答える。そこへアンナ・エリザの従者ピンピネリが現れ、狩りに来た公国夫人がここで食事をしたから、20人分の用意をするよう亭主に告げる。そこへアンナ・エリザが現れ、自分はナポレオンの妹であるが、夫は次々と愛人を作り、その最後の女性は私のオペラ劇場のプリマドンナであるベラだ、と言う。ヴァイオリンの音色に魅せられ、「あれは誰?」と訊ねる(2)。パガニーニが現れ、キャンティ・ワインを飲みながらイタリアを称え、一目で好きになった美しいアンナ・エリザに乾杯する(3)。そして、明日ここで演奏会があるから出席して欲しいと頼む。アンナ・エリザは「あなたは偉大な芸術家だが、魔法使いのようだ」と言い、パガニーニは自分のヴァイオリンについて語る(4)。そこへバルトゥッチがやって来て、演奏会の開催が禁止された、と告げる。アンナ・エリザはそれは何かの間違いだ、というが、パガニーニは怒り、ここでは演奏しない、と言う。アンナ・エリザはその激しい気性に惹かれる(5)。そこへプリマ・ドンナのベラが現れ、ピンピネリが、アンナ・エリザの夫フェリーチェとあなたのことを夫人が知っており、夫人がここにいる、と告げる(6)。そこへフェリーチェが現れ、妻のアンナ・エリザに気付くと、横にパガニーニが立っている(7)。「あれは誰?」と公が妻に訊くと、「パガニーニ。彼は明日ここで演奏会をする」と言う。公は「演奏会は開かない」と言う。ここで二人はやりとりするが、妻に弱みを握られている公は演奏会禁止の命令を撤回する。

## 「第2幕」

ルッカの公の城大広間で、机を挟んでパガニーニとピンピネリが座り、カード遊びをしている。多くの紳士、ベラも加えた淑女が彼らを囲んでいる。ベラが“愛がなければ涙はなく、憧れもない・・・”と歌う(8)。ピンピネリはベラを愛しているが、いつも公に先取りされている。しかし、パガニーニはカードゲームでピンピネリに負け、大切なヴァイオリンをかたに取られる。そこへフェリーチェ公が現れ、宮廷指揮者・歌劇場総監督に任命されたパガニーニに出し物を訊ねる。パガニーニは「ウィーンのケルトナー門劇場のために書かれたケルビーニの新しいオペラ、ファニスカです」という。公は「私たちの美しいプリマ・ドンナ、ベラはそこで何を歌うのか」と訊く。ベラはオペラのフィナーレ：

“苦痛が去ったとき、神は私たちに勇気と力を与える・・・”(Aller Schmerz ist überwunden, Gott verlieh' uns Mut und Kraft!----)

と歌う。公はベラノ素晴らしさを称える。

そこへパガニーニが現れ、ピンピネリはパガニーニに女性の心を掴む方法を教えてくれれば

彼の大切なストラディヴァリ・ヴァイオリンを返してもいい、と言う。パガニーニは女たちにはかまわずにキスをするのがいい、と歌う (9, 図23) :

## Nr. 9. Gern hab' ich die Frau'n geküßt. . .

(Lied Paganinis.)

- ◆ Pimpinelli: Da ist die Gelge.
- ◆◆ Paganini: Ich habe nie darüber nachgedacht.

**Allegretto moderato (non troppo.  $\text{♩} = 52$ )** **Paganini:**

**Gern**  
Viol. Solo

*mf sehr weich* *ppp rit.* *p* *a tempo*

Fl. Streich  
Klar.  
Cello  
Fg. Harfe  
Harfe  
Cello Solo Melodie  
Str. pizz.

Pag. hab' ich die Frau'n ge - küßt, hab' nie ge - fragt, ob es ge - stat - tet ist,

Pag. dach - te mir: nimm sie dir, küß' sie nur,

Pag. da - zu sind sie ja hier! Ja, glaubt mir: Nie nahm ich die Lie - be schwer.

1. Horn ged.  
Fag. Cello  
2. Fl.  
Viol. Solo  
Harfe  
*ppp rit.* *a tempo*

図23. 同上。パガニーニのアリア“喜んで接吻します”(曲番号9)。

Gern hab' ich die Frau'n geküsst,	私は女たちに口づけをした、
Hab' nie gefragt, ob es gestattet ist;	どうしてだか訊かないで!
Dachte mir; Nimm sie dir, Küss' sie dir,	私のことを想っておくれ、口づけをして
Küss' Sie nur,	おくれ。
Dazu sind sie ja hier! Ja, glaubt mir:	だからここにいるのだ。
Nie nahm ich die Liebe schwer, Ich liebe heiss,	愛は決して難しいものではない、
Doch treu bin ich nicht sehr; bin ein Mann,	だけど男として
nicht viel dran,	貞淑ではない、
Liebchen fein, ich schau auch andre an!	愛しい人よ!

そこへアンナ・エリザが現れ、パガニーニに私を愛しているか、と互いの愛を確かめる(10)。そして、アンナ・エリザの求めに応じてパガニーニはヴァイオリンを奏でる。ピンピネリとベラがやってきてロマンティックな2重唱を歌う(11)が、そこへパガニーニが現れ、パガニーニはベラの魅力に負け、デートの約束をし、愛の歌を捧げる。これを知ったアンナ・エリザは怒り、パガニーニを責める(12)。そしてパガニーニを拘束しようとする。しかし、パガニーニを愛するアンナ・エリザは愛の歌を歌う(13、図24)：

Liebe, du Himmel auf Erden, ewig besteh'!	愛する人よ、お前は地上の天国だ!
Liebe, du Traum aller Träume, niemals vergeh'!	愛、それは夢の中の夢、決して去らない!
Du sollst mich umschweben, holdselig im Leben	お前は私の側で人生を楽しくする。
Nur du gibst unserm Sein, Inhalt allein!	お前だけが私たちの存在を支える!
Liebe, du Himmel auf Erden, ewig besteh'!	愛する人よ、お前は地上の天国だ!
Liebe, du Traum aller Träume, niemals vergeh'!	愛、それは夢の中の夢、決して去らない!
Du schenkst alle Freuden, du heilst alle Leiden,	お前は全ての人に愛を与え、悩みを癒す
Dein, dein ist die Macht, ueber jedes Herz!	お前は全ての人の上に力を与える!

ベラもパガニーニを愛しており、状況は複雑になる。フィナーレは宮廷の広間。ここでスキヤンダルに興味深々としている宮廷の人々の目にパガニーニは曝される。パガニーニは魔法の弓を駆使してヴァイオリンを演奏し、人々に、そしてアンナ・エリザに感銘を与える(14)。この第2幕終わりのヴァイオリンの独奏は第1幕初めと同様、印象に残る。

### 「第3幕」

ルッカ郊外の旅籠屋で密輸業者たちがカード遊びをしている(15、16)。そこへ宮殿を抜け出したバルトゥッチとパガニーニが入ってくる。パガニーニは取り戻した彼の楽器を眺めながらその美しさを称える(17)。そこへベラがパガニーニを追ってやって来てパガニーニに愛を告げながら二人は歌う(18)が、パガニーニはベラの愛を受けず、ベラはピンピネリの許に行くことにする。そこへ変装したアンナ・エリザが現れ、愛しながらもパガニーニと別れようとする(19)：



Valse moderato.

A. E. Lie - - be, du Him-mel auf Er - den, e - - wig be - steh'! Lie - - be, du

*p* Klar. *p* Harfe

A. E. Traum al - ler Träu - me, nie - - mais ver - geh'! Du sollst mich um - schwe - ben

*poco animato* *f*

A. E. *p* hoid - se - lig im Le - ben, nur du gibst un - serm' Sein In - halt al - lein!

*meno* *a tempo* Cello string.

A. E. Lie - be, du Him-mel auf Er - den, e - - wig be - steh'!

*Picc. Trill. Fl.* *Holz. Fl.* *rit.* *p a tempo* Cello Gegenmelodie 4 Hr. *Fr.*

G. V. 50

図24. 同上。アンナ・エリーザの歌うワルツ“愛の歌”(曲番号13)。

Wo meine Wiege stand, ich weiss es nicht!	私はどこで生まれたのか知らない!
Bin nur ein leichtes Blut! Mehr weiss ich nicht!	ただ浮気かどうか知らない!
Singe in Schenken, wo man mich gerne sieht,	私は喜んで会ってくれる人にお返しで
Für lumpiges Geld	歌うのだ、わずかなお金のために。
Mein lockendes Lied:	私の魅力的な歌は言う:
Wer will heute macht mein Liebster sein?	誰が今夜は私の愛する人になるのか?

パガニーニはアンナ・エリザの手をとり、一同で踊る。そして彼女はパガニーニに

“あなたはもう自由です。誰か外の女性とお行きなさい” (Ich gebe dich frei, geh mit der anderen---)

と言うが、パガニーニは

“あなたと私の間にはどんな女もいません。私は一人です”

と答える (20)。そして彼はバルトゥッチと旅に出る。幕

レコードは例によって著名な歌手手を揃え、なかんづくアンナ・エリザのローテンベルガー、パガニーニのゲッダは素晴らしいが、ベラのミリャヴィッチの声は美しい。オーケストラはミュンヘンのバイエルン交響楽団だが、このオペレッタに縁の深いボスコフスキーの優雅な指揮による演奏は全体をよく歌わせ、筆者の好きな盤である。

{フリーデリケ} (Friederike)

ここでレハールのさらに一つの悲劇的“歴史”オペレッタ「フリーデリケ」について付言しておきたい。筆者はこのオペレッタを観たことはないし、全曲レコードも知らない。ただこのオペレッタのなかの一曲が含まれるCDを持っているだけである (Barbara Hendricks: *Airs d'Operettes*, Philharmonia Orchestra, L. Foster, EMI)。ゲーテ (Johann Wolfgang Goethe) のシュトラスブール時代の恋人を主題にしたオペレッタだが、その内容を筆者は知らない。しかし、自然科学者・詩人・政治家ゲーテの生涯を、その恋愛遍歴と共にまとめたのが表16である。

はじめライプチヒ大学で学んだのち、1768年、フランクフルトの実家に一旦帰り、ゲーテ20歳の1770年、改めてシュトラスブール大学へ入学した。ここで牧師の娘フリーデリケ (Friederike Brion) と恋をしたが、ゲーテが彼女を捨て、この恋は悲劇のうちに終わる。この話がレハールの“歴史”兼“悲劇”オペレッタの一つに題材を提供したわけらしい。CDにも入っているフリーデリケの歌は以下のとおりである:

“Warum hast du mich wach geküsst?” (なぜあなたは私を口づけで目覚めさせたのでしょうか? 西野茂雄訳)

Warum hast du mich wachgeküsst?	なぜあなたは私を口づけで目覚めさせたの?
Hab' nicht gewusst, was Liebe ist.	恋とはどんなものか私は知らなかったのに。
Mein Herz war leicht wie Laub im Wind.	私の心は風の中の木の葉のように軽やかだ。
Ich war kein Weib, ich war ein Kind,	私は女でなく、まだ子供だったのよ。
als du wie eine Gottheit kamst	あなたが神様のように現れて
und mich in deine Arme nahmst.	私をあなたの腕に抱いた時に

O, welch ein Glück hat mir dein Kuss gegeben!	おお、あなたの口づけは何という幸福を与えてくれたことでしょう！
Wie hast du ganz erfüllt mein junges Leben!	あなたは私の若い命を何とすみずみまで満たしたことでしょう！
Mit jeder Faser meines Herzens was ich dein und meine Welt warst du allein!	身も心も捧げて、私はあなたのものであり、 あなただけが私の世界でした！
Nun weiss ich nicht, wie mir geschieht.	今、私は自分がどうなっているのか判りません。
Der Frühlingstraum, er ist verblüht.	春の夢は消えしぼんでしまいました。
Jetzt muss ich kämpfen um dein Glück und bleibe mit meinem Leid zurück.	今や私はあなたの幸福のために戦わねば ならず、私の苦しみとともに後に留まります。
damit du frei und herrlich bist.	それによってあなたが自由で、ご立派であられるように。
Warum hast du mich wachgeküsst?	なぜあなたは私を口づけで目覚めさせたのでしょうか？

表16. ゲーテの年表

年	ゲーテ事項	その恋（ヨーロッパ事項）
1749	裕福な宮中顧問官の子として フランクフルトに生まれる	
1784		(ヨーゼフ2世、神聖ローマ帝国皇帝)
1765-68	ライプチヒ大学入学、帰郷	3歳年長のアンナ・カタリーナとの恋 (Anna Katharina Schönkopf:Kathchen)
1770	シュトラスブルク大学入学	牧師の娘フリーデリケとの恋 (Fiederike Brion)
1771	「野バラ」、「五月の歌」出版 フランクフルトで弁護士開業	
1772	「若きヴェルテルの悩み」執筆	友人の許嫁シャルロッテとの恋。これが ヴェルテルの題材となった (Charlotte Buch)
1774	同上出版	
1775	第一次スイス旅行、Sachsen- Weimar公国の Karl Augustの 招きでWeimarへ	銀行家の娘リリと婚約、 間もなく解消 (Lili Schonemann)
1776	同上枢密顧問官に任命される 「ファウスト」執筆にかかる	32歳(6歳年長)のシュタイン夫人との 恋が始まり、彼女84歳の1827年まで続

	イタリア旅行	き、この間、ゲーテの他の女性との恋愛を批判 (Charlotte von Stein)
1779	第二次スイス旅行	
1782	貴族に列せられる。父の死	
1784	人間の頭蓋の顎間骨を発見	
1885	植物学の研究開始	
1786	イタリア旅行	
1788		クリスティーヌと内縁関係、翌年アウグストが生まれる。シュタイン夫人は大いに怒るが、のち和解 (Christine Vulpius, August) (フランス革命)
1789		
1890	解剖学、植物学、光学の研究 「植物変態論」出版	
1791	宮廷劇場監督に就任	
1792	フランスへ従軍	
1794	シラーと知り合う。「比較解剖学序説」出版	
1796	「ウィルヘルム・マイスターの 修業時代」出版、以後出版多数	
1804		シュタール夫人と会う (Stahl) (ナポレオン、皇帝となる)
1805	シラー死去	
1806		クリスティーヌと正式結婚、妻の小間使兼秘書で17歳のカロリーネと恋愛 (Caroline) (フランス軍がワイマール占領) (神聖ローマ帝国滅亡)
1807	「ファウスト」第1部出版	
1808	母死去。ナポレオンと合う	
1809	「親和力」(Die Wahlverwandtschaften) 出版、「色彩論」研究	ミンナとの恋 (Minna Herzlieb) 「親和力」の題材となる
1810	「ゲーテ著作集」完結	
1812	ベートヴェンと会う	(ナポレオン、ロシア遠征)
1814		(ナポレオン退位、エルバ島へ) (ウィーン会議)
1815	ライン、マインへの旅	(ナポレオン、セントヘレナへ)
1816		クリスティーヌ死去。銀行家の新妻マリアンヌとの恋 (Marianne)、「いちよしの葉」の題材となる

1819	全20巻「ゲーテ著作集」完成	
1821		1806年に心惹かれたアマリエの娘、 17歳のウルリーケとの恋愛 (Amalie, Ulrike)
1826	「ファウスト」第2部出版	
1832	3月22日永眠、82歳	

多方面に才能を示した文字通りの天才ゲーテは、多くの女性と恋愛することによって自分の創造性を高め、そしてこれを保ったと言われる。結婚という妥協を極力排し、反道徳の危険を省みず、高揚した瞬間を積み重ねる事がその生き方の理想であった。したがって、彼の恋愛対象としては、友人の許嫁、新婚早々の若妻、年長の人妻、あるいは結婚など考えられない少女などを選んだ。彼女らとのかなわぬ恋で燃え上がるが、やがて恋は燃え尽きたとき、身を転じることによって道徳的負い目を少なくする、という天才の人生であった。

このオペレッタの解説は渡辺忠雄 (1990) やWürz (1978) にある。

#### D-4. ロシアの皇太子 (Der Zarewitsch)

レハールのもう一つの悲劇的“歴史”オペレッタは「ロシアの皇太子」である。1925年、ウィーンのドイツ国民劇場 (Deutsche Volksoper in Wien) でレハールはツァポルスカ (Gabryela Zapolska) による舞台劇 "Der Zarewitsch" を観、たちまち興味を覚えた。彼は直ちに作曲の権利を申請した。ポーランド生まれのツァポルスカはすでに1921年亡くなっていたが、彼女はフランスのゾラ (Emil Zola) の影響を受けており、レハールの台本を書いたイエナツハヤライヘルトとは異なる味わいを持っていた。彼らによってオペレッタ向きに手を加えられたが、喜劇の要素は最小限に留められた。このオペレッタの初演は1927年2月21日、ベルリンのドイツ芸術家劇場 (Deutsches Künstler-Theater in Berlin) で行われた。

「ロシアの皇太子」は実際にあったロシア皇室の話が基礎になっている。ピョートル大帝 (Pyotr I, 1672-1725)\* の長男、アレクセイ (Alexej) はそのフィンランド人の恋人と國を去り、イタリアのナポリへ行った。しかし、そこで彼はロシアの有力な貴族たちから祖国へ帰るよう言われた。しかし、彼は父に訴えられ、28歳で獄死した。ツァポルスカのドラマはこの史実にしたがって忠実に書かれていたが、レハールのオペレッタでは台本作者によって改変され、音楽としてはバラライカとハーブが重要な役割を演じている。

#### |ストーリーと音楽|

登場人物と2つの全曲レコードのキャストは表17の通りである。以下、グロッケンのピアノ・ヴォーカルスコアの曲番号にしたがってストーリーを追いたい (表18)。

\* 筆者註：ロシア皇帝。実験を握る異母姉の陰謀を挫いて1689年、名実ともに権力を掌握、まずトルコと戦い、自らオランダ、イギリスなどを歴訪して対トルコ同盟の拡大に努めた。造船術、砲術を学び、各国の風俗、制度を研究し、ユリウス歴を採用するなど、ロシアに多くの改革を行い、軍制も改めた。ペテルスブルグを首都とし、ロシアの近代化、西欧化を行った英明君主であった。

表17. 「ロシアの皇太子」の登場人物と2種類の全曲レコードのキャスト

指揮者	Willi Mattes		Heinz Wallberg
オーケストラ	Bayerisches Symph.Orch.		Münchner Rundfunkorch.
登場人物	歌い手		
Der Zarewitsch	皇太子	Nicolai Gedda	Rene Kollo
Der Grassfürst, sein Oheim	その大伯父	Hans Söhnker	Ivan Rebroff
Der Ministerpräsident	首相	Anton Reiner	Günther Sauer
Sonja	ソーニャ	Rita Streich	Lucia Popp
Iwan, der Leiblakei	従僕イワン	Harry Friedauer	Norbert Orth
Mascha, seine Frau	その妻マーシャ	Ursula Reichart	Elfriede Höbarth

表18. 「ロシアの皇太子」の曲番号 (ピアノ・ヴォーカルスコア、Glocken Verlag,1955)から.

## 1. Akt

1. Introduction (Chor) Es steht ein Soldat am Wolgastrand
2. Melodrama (Grossfürst mit Damen)
3. Schauke, Liebchen, schauke, Duett (Mascha, Iwan) Dich nur allein nenne ich mein
4. Einer wird kommen, Lied (Sonja) Einer wird kommen
5. Wolgalied (Zarewitsch) Allein, wieder allein
6. Finale I (Sonja, Zarewitsch, Iwan) Ein Weib! Du, ein Weib

## 2. Akt

7. Introduction, Lied und Tanz (Zarewitsch, usw.) Herz, warum schlägst du so bang
8. Hab' nur dich allein, Duett (Zarewitsch, Sonja) Bleib' bei mir
9. Napolitana, Lied (Zarewitsch) Heute hab' ich meinen schönsten Tag
10. Heute Abend komm' ich zu dir, Duett (Mascha, Iwan) Was mir einst an dir gefiel
11. Das Leben ruft! Walzerlied und Tanz (Sonja, Tanserrinnen) Bin ein glückliches Menschenkind
12. Liebe mich, küsse mich Szene und Duett (Sonja, Zarewitsch) Ob dortwohl viele schöne Damen sind?
13. Finale II. (Sonja, Zarewitsch, usw.) Setz' dich her

## 3. Akt

## 13 1/2 Intermezzo

14. Kosende Wellen. Lied und Melodrama (Sonja, Zarewitsch) Kosende Wellen
15. Küss' mich! Duett (Sonja, Zarewitsch) Mädél, wonninges Mädél

16. Ich bin bereit. Tanzduett (Mascha, Iwan) Komm an meine Brust

17. Finale III. (Sonja, Zarewitsch, Grossfürst) Mein teurer, einziger Aljoscha

---

「第1幕」

19世紀の終り頃、ペテルスブルグにあるロシア皇帝の宮殿では、お祭りのバレエが行われており、舞台ではコーカサスの合唱とバラライカの音楽が奏されている (1、2)。従僕のイワンは婦人の財布を見つけて持っているところを妻のマーシャに見つけられ、言い訳をする (3)。皇太子は女性に興味がなく、未だに皇女となるべき女性が決まっていない。伯父と首相は心配して一計を案じ、一人の踊り子、ソーニャに男のコーカサス衣装を着せ、若い男のスポーツ相手として皇太子の所へ遣わすことにする (4)。部屋で皇太子は「ヴォルガの歌」を歌っている (5)。そこへイワンに伴われ、コーカサスの少年の服装をしたソーニャが皇太子のもとへ来る。ソーニャを少年と思った皇太子と一緒にスポーツをしようと言うのでソーニャは仕方なくその命に従う。皇太子は着換えをするソーニャを見て驚く (6)：

“Ein Weib! Du ein Weib! お前は女なのか!”

皇太子は怒ってソーニャを打とうとするが、彼女は恐れず皇太子の前に立つ。彼女は従順に躡けられてはいたが、たとえ王家の人にも打たれることは好まなかった。皇太子は彼女にここを去るように命ずるが、彼女は皇太子と一緒に居たいと言う。そのため、毎晩皇太子の所へ恋人のふりをして来たいと言う。皇室がこれ以上策を弄して皇太子を結婚させようとしないうちに良い方法だと、皇太子は彼女に同意する。二人はシャンパンを飲み、皇太子は一時の孤独を忘れるが、ソーニャは去っていく (Finale)：

“Champagner ist ein Feuerwein                      シャンパンは火の酒だ  
Es steht ein Soldat am Wolgastrand                  ヴォルガ河畔に一人の兵士が立っている”

---

「第2幕」

宮廷では人々が集まってバラライカの音楽で踊っているが、皇太子は自分の未来を考え、思いに耽っている (7)。しかし、彼は次第に快活になる。人々は去り、そこへソーニャが来る。皇太子は自分がソーニャに魅せられていることに気付き、彼女に彼の宮殿に移るよう、そして今後、踊り子としての仕事をしないことを望む (8)：

“Bleib bei mir    私の側にいておくれ  
Hab' nur dich allein                                      おまえだけにいて欲しい”

こうして皇太子は生涯初めて恋に落ちる (9)：

“Heute hab' ich meinen schönsten Tag                  今日は私にとってもっとも美しい日だ  
O, komm, es hat der Frühling ach nur einen Mai      おいで! 春に5月は1度しか来ない”

---

女好きのイワンはソーニャの踊り子仲間と恋の火遊びをしている。そこへ嫉妬深い彼の妻マーシャが現れ、イワンは苦勞して誤魔化す (10)。次の場面では、ソーニャが踊り子の友人た

ちに彼女がいかに幸福であるかを説明する (11) :

“Bin ein glückseliges Menschenkind  
Das Leben ruft

私はもっとも幸せな人間だ  
命の息吹が呼び起こされる”

皇太子とソーニャの幸せには暗雲が立ちこめる。というのは、踊り子と皇太子の恋は許されぬもので、役目の終わったソーニャは大伯父の命により皇太子の宮殿から立ち去らされることになる。ただし、彼女が過去の多くの男たちとの恋の経験を語るなら (事実には反するが)、宮殿に留まってもよいという条件を付けられ、皇太子の側に居られるなら、とソーニャは条件を飲む (12) :

“Es warten die kleinen Mädchen aufs grosse Glück 一人の少女はすばらしい幸福を  
待っている  
Liebe mich, küsse mich 私を愛して、私に口づけをして”

そこへ皇帝の命を受けた首相が皇太子への命令を持って現れる。それは皇女ミリツァと婚約するため夜会に出席するように、というものであった。皇太子はこの命令に服従しない決心をする。首相が来たので隣室に隠れていたソーニャは首相が去ったあと皇太子のところへ戻り、彼を元気づける。そして彼女はその踊り子仲間の友人たちの助けを求める (13, Finale II) :

“Setz' dich her. お座りなさい  
Wir Tscherkessen brauchen weder Gut noch Geld 私たちコーカサス人は財産も金も  
いらぬ  
Jetzt weiss ich, was das Leben ist 人生とは何かを私は知っている”

大伯父が現れ、ソーニャの恋の遍歴について話を聞いた皇太子は自棄になり、皇帝の命にしたがってミリツァのための夜会に出席することにする。しかし、彼はソーニャを呼んで真実を告げるよう要求する。ソーニャは彼以外に誰も愛したことがない、と神に誓い、皇太子は彼女を腕に抱く。

### 「第3幕」

間奏曲 (13) ののち、舞台は南国イタリアの公園で、ヤシの樹、オレンジ、レモンの樹がある。小さな家があり、地中海の青い海が見える。皇太子とソーニャはナポリに来たのであった (14) :

“Kosende Wellen 心地よい波  
Warum hat jeder Frühling ach nur einen Mai なぜ春に5月は一度しか来ないのだろうか?”

天国に居るような気分で二人は幸せに浸っている (15) :

“Mädel, wonniges Mädel すばらしい乙女よ  
Küss' mich 私に口づけをしておくれ”

皇帝の命令でナポリへイワンが妻のマーシャとやって来た。イワンはイタリアの女性の美しさに夢中になるが、妻もマンドリンを奏で、“サンタ・ルチア”を歌うナポリ男に心を奪われ



る。これを見たイワンは嫉妬する (16)。

バラライカの音楽とともに大伯父が供の者とナポリに現れ、皇太子に國へ帰るよう説得する。皇太子はソーニャと結婚し、必要なら王位を放棄するという。こうなれば皇太子の心を変えることができるのはソーニャだけだと悟った大伯父は、ソーニャにロシアの人々のために皇太子に帰国するよう決意を帰させて欲しいという (17)。ソーニャは皇太子に別れを告げる決心をする。そこへ皇帝死去の知らせが届く。恋を失ったソーニャを残し、新しい皇帝は大伯父と故国へ帰る。

2種類の全曲レコードを聴くと、いずれ劣らぬ名演奏である。どちらがより優れているかは個人の好みの問題もあるので一概には言えないが、両者にそれぞれ特徴があり、レコードならではの優れた歌い手を揃えている。筆者の好みから言えば、皇太子はルネ・コロが上品で歌に深みを感じる。また、ソーニャは断然シュトライヒがいい。オーケストラの演奏を比べると、筆者にはバイエルン交響楽団が好みに合っている。

このオペレッタは多くの美しい音楽で満たされているが、何とんでもこのオペレッタを代表するワルツは次の曲であろう (図25)：

“Warum hat jeder Frühling, ach, nur einen Mai?	なぜ春に5月は一度しか来ない のだろう？
Warum geht denn die Liebe gar so schnell vorbei?	なぜ愛はそんなに早く過ぎ去る のだろう？
Mein Herz, du sollst nicht fragen, liebe nur, dann---	私の心よ、問うなかれ、愛がある のみ！

また、「パガニーニ」の場合はヴァイオリンの響きが特徴であったように、この「ロシアの皇太子」ではバラライカがこのオペレッタの特徴となっている。

#### D-5. ジュディッタ

クネプラー (Paul Knepler) とレーナー・ベダ (Fritz Loehner-Beda) の台本によるこのオペレッタには、レハールの信頼するスター・テナーのタウバーの意見を入れて作曲された。内容はビゼーのカルメンを彷彿とさせ、ジプシー女を主題とした「フラスキータ」(Frasquita, 1933) の雰囲気を持っている。また、このオペレッタはプッチーニの影響を受けていると言われる。1934年1月20日、ウィーン国立歌劇場で、レハール自身の指揮、タウバーのオクタヴィオで初演された。レハールはこのオペレッタの有名なアリア、たとえば“お前は私の太陽”(Du bist meine Sonne) などをタウバーのために作曲したと言われる (Scherle, 1985)。このオペレッタは「陽気な未亡人」や「ルクセンブルク伯爵」あるいは「微笑みの國」ほど多くの忘れがたいメロディーを含んでいるわけでもないので、レハールの代表的“オペレッタ”の中には入らないかも知れない。オペレッタの基準から言えば、この「ジュディッタ」は、レハールの袋小路とも言えよう。また、いわばウィーン・オペレッタとイタリア歌曲 (bel canto) の合成という評価もできるだろう (同上)。

⑥ Moderato  
Sonja

War - um hat je - der Früh - ling, ach, nur ei - nen Mai? War - um

Sja  
geht denn die Lie - be gar so schnell vor - bei? Mein Herz, du sollst nicht fra - gen,

Sja  
(ihre Stimme versagt, sie schwankt, stützt sich an die Säule,  
lie - be nur, dann...

senkt langsam den Kopf.) Vorhang ab

*pp* *a tempo* *ff*

*pp* *p* *p* *ff*

*pp* *p* *ff*

*pp* *p* *ff*

G. V. 88

Waldheim-Eberle, Wien VII.

図25. 「ロシアの皇太子」のワルツ。

## |ストーリーと曲|

筆者はこのオペレッタをステージで聴いたことはないが、全曲レコードがあるので、これとピアノ・ヴォーカルスコアにしたがって概観したい。登場人物と全曲レコードのキャストは表19のとおりである。また、表20の曲番号にしたがってストーリーを追いたい。このオペレッタは従来のもものと異なり、第1-3幕という分け方でなく、場面1-5という配列にしているのも特徴である。

表19. 「ジュディッタ」の登場人物と全曲レコードのキャスト

指揮者	Willi Boskovsky
オーケストラ	Muenchner Fundfunkorchester
<u>登場人物</u>	
Manuele Biffi	Klaus Hirte
Giuditta, seine Frau	Edda Moser
Octavio, Hauptmann	Nicolai Gedda
Lord Barrymore	Juergen Jung
Der Herzog	Thomas Wiedenhofer
Der Adjutant des Herzogs	Jürgen von Pawels
Martini, Nachtclubbesitzer	Günter Wewel
Anita, ein Fischermädchen	Brigitte Lindner
Pierrino, Obsthaendler	Martin Finke
Sebastiano, Wirt	Friedrich Lenz

表20. 「ジュディッタ」の曲番号

1. Bild
  1. Vorspiel und Ensemble-Szene
  2. Duet
  3. Spielduett
  4. Auftrittslied (Octavio)
  5. Auftrittslied und Duett-Szene (Giuditta und Octavio)
  - 5-1/2. Spielszene
  6. Finale
2. Bild
  7. Melodrama und Duett
  - 7-1/2. Reminiszenz
  8. Duett (Octavio und Jiuditta)
  9. Finaletto
3. Bild
  10. Chor der Soldaten, Melodrama und Duett
  11. Lied (Octavio)
  12. Finale
4. Bild
  13. Tanzlied (Giuditta)
  14. Lied (Martini)
  15. Duett (Anita und Pierrino)
  16. Lied (Giuditta)
  17. Finale
5. Bild

## 18. Lied (Octavio)

## 18-1/2. Reminiscenz

## 19. Szene (Octavio und Giuditta)

## 20. Finaletto

## 「第1場面」

舞台は地中海に面した港町の広場で、左手に宿屋「黄金の帆船」があり、いくつかのテーブルが並んでいる。さらに平らな屋根の理髪店と靴修理店が軒を並べている。右手には小さなマニエレの家があり、通りからは数段のステップで登るようになっている。また、旅籠屋とマニエレの家の後方には狭い道がある。ある日の午後、2台のマンドリンと2人の歌手からなる楽隊がマニエレの家の前で人々に囲まれ、歌い踊っている。女たちは洗濯し、宿屋では数人の客がワインを飲んでいる (1)。その中には果物売りのピエリノや魚売りのアニータもいる (2)。彼らが去ると、家からマニエレが鳥かごを持って現れ、砂糖をひとつまみして鳥に与える。宿屋の亭主がマニエレに“その鳥かごを持ってどこへ行くのか”と怒鳴る。“オルシニ侯爵様の命令でね”と2人のやりとりがある (3)。船長のオクタヴィオが登場する (4) (英訳はAdam Carstairsによる。以下同じ)：

Freunde, das Leben ist lebenswert!	Comrades, this life is the life for me!
Jeder Tag kann Schönes uns geben,	Every single day is a pleasure.
jeder Tag ein neues Erleben,	Every day brings moments to excite,
jede Stunde verjüngt sich die Welt!	Every hour has the power to excite,
Die herrliche Welt!	to fill with delight!
Sinkt die Sonne abends nieder,	As the sun sets, blazing with fire,
strahlend steht sie morgen wieder	I know the morning will bring it again
auf den blauen Himmelszelt!	to climb yet higher in the sky!
Freunde, das Leben ist lebenswert!	Comrades, this life is the life for me!

そこへ副官のアントニオが現れ、他の従者たちと去ろうとする。家の中からジュディッタの声が聞こえ、オクタヴィオはその声の方に顔を向ける。彼女は家から外へ現れ、誰かが私を待っていると歌い、これに応じてオクタヴィオはジュディッタの美しさを称える (5)：

{Giuditta}

Ah! Wohin, wohin will es mich treiben,	I am so restless, thinking and dreaming,
wohin, wohin sieht mich mein Los?	somewhere, I know a soul-mate waits
	for me.
Kann nicht verweilen, kann nirgends bleiben,	Maybe he is waiting now
denn meine Sehnsucht, sie ist so gross, so gross!	searching the world and dreaming as
	I do!



so wunderschön wie des Südens Blütenpracht    your lovely eyes enslave me now with  
 love.  
 bist du, mein süßes Weib,  
 und ich liebe deinen weissen Leib,  
 und ich liebe deiner Augen Glut  
 und dein wilder, heisses Blut!

(Giuditta)

Schön, wie holder Märchentraum    Yours, yours is the victory  
 ist jeder Tag, er vergeht, ich fühl' es kaum"!    I live for you, never, never set me free.  
 Wie wird mein Herz so weit    Stay here with me tonight.  
 und es jubelt voller Seligkeit    let the whole world disappear from sight.  
 und die Erde trägt ihr Hochzeitskleid,  
 alles atmet Liebe!    With a love like this, why should I fight  
 against my heart?

(著者注：この部分の英訳は忠実とは思えない)

ピエリーノがアニータの部屋の窓の下で愛の歌を歌う (9)。

### 「第3場面」

月明かりの駐屯軍のキャンプ。左手に将校のテントがあり、ランプを灯した長い机にオクタヴィオとアントニオが座り、オクタヴィオはタバコを吸いながら思いにふけている。机の上に広げた地図をアントニオは見ており、双眼鏡やカップが傍らにある。右手には色彩豊かな軍服を着た兵士たちが思い思いに座ったり、寝そべったりしてタバコを吸い、あるいはサイコロ遊びをしている。遠くに北アフリカの町のシルエットが見える。ジュディッタを想うオクタヴィオとアントニオは語り合い、兵士たちは歌う (10)。オクタヴィオはジュディッタに愛の歌を歌う (11)：

Welch tiefes Rätsel ist die Liebe, zwei Menschen gestern noch einander fremd, sind heute willenlos verbunden, als hätten ihre Seelen sich gesucht und endlich sich gefunden!	I will never understand the mystery, we are two people who were strangers yesterday, now linked in love forever, as though our souls wandered through the world, and suddenly found each other!
Du bist meine Sonne, du bist ein Traum voll süßser Wonne!	Love, gentle and tender, all through my life shall remember.
Kann ich nicht bei dir sein, ist mir die Welt so leer.	Each time I see you with stars shining in in your eyes,
Blüten und Blumen, sie blühen für mich nicht mehr!	Happiness lifts me so high, I could touch the skies,
Du bist meine Seele.	Love, sweet and enchanted.

(著者注：この英訳も直訳ではない)

前線へ出動しようとするオクタヴィオをジュディッタが止めようとする (12)。しかし、彼の義務感はジュディッタへの愛より強く、オクタヴィオは彼女を振りきって出動する。

〔第4場面〕

北アフリカの町にあるナイトクラブ“アルカザール”(Alcazar)。パリ風だが東洋の香りもある。タバコの煙とワイングラスの音。舞台では踊り子たちが歌い、踊っている。そこへジュディッタが大喝采のうちに舞台に現れ、歌い踊る (13)：

In einem Meer von Liebe möcht' ich so ganz versinken,	A sea of love enfolds me and
	its magic holds her
ein süsser Rausch von Liebesseligkeiten hüll' mich ein!	and in defenceless when I
	try to fight against its
	power.
Ich möchte gerne sterbend noch heisse Küsse trinken	I feel its arms around me, so
	gently it surrounds me,
und noch mein letzter Hauch, er soll ein Liebesseufzer sein.	I only pray my dying breath will
	be a sigh of love!

ナイトクラブの主人マルティニがジュディッタの歌と踊りを称え、彼女に捧げた歌を歌う (14)。ピエリーノとアニータが故郷を想って歌う (15)。そこへジュディッタに好意を持つ英国の貴族バリモアがやってくる。ジュディッタは舞台上がり、このオペレッタでもっとも有名なワルツで恋の歌を歌う (16、図26)：

Ich weiss es selber nicht, warum man	It is a mystery,
gleich von Liebe spricht,	Whenever men are close to me,
wenn man in meiner Nähe ist,	their thoughts and words all turn to love,
in meine Augen schaut und meine	their eyes all burn wth love,
Hände küsst.	
Ich weiss es selber nicht, warum man	when they just look at me.
von dem Zauber spricht,	There is some power, I am told,
dem keiner widersteht, wenn er mich	that fascinates them young or old,
sieht, wenn er an mir vorübergeht!	for they cannot resist the chance of being
	passionately kissed by me!
Doch wenn das rote Licht erglüht	And when the candles dimly glow,
zur mitternächt'gen Stund',	and love is in the air,
wenn alle lauschen meinem Lied,	I wait with bated breath to know
dann wird mir klar der Grund:	which man among you dare....
Meine Lippen, sie küssen so heiss,	Kiss my lips and your heart is a flame,
Meine Glieder sind schmeigsam und weiss,	watch me dance and you know who's to

in den Sternen da steht es geschrieben,  
du sollst küssen, du sollst lieben!]

(著者注：この英訳も直訳ではない)

blame!

This is my way of saying "I'm here, love."

Hold me closely, have no fear, love!

er an mir vor-ü-ber geht! Doch wenn das ro-te Licht er-glüht, zur mit-ter-hächt'-gen

Stund', und al-le lau-schen mei-nem Lied, dann wird mir klar der Grund: — Mei-ne

① Valse moderato  
Lip-pen, sie küs-sen so heiß, meine Gli-e-der sind schmiegsam und weiß, in den

Ster-nen, da steht es ge-schrie-ben, — du sollst küs-sen, — du sollst lie-ben! — Mei-ne

Fü-ße, sie schwe-ben da-hin, — mei-ne Au-gen, sie lok-ken und glüh'n, und ich

G. V. 364

図26. 「ジュディッタ」のワルツ (曲番号16)



バリモアは踊るジュディッタのところへ行き、彼女の美しさを称える(16-1/2)。彼らが別室へ行ったあと、オクタヴィオが入ってくる。彼は赤ワインを注文し、亭主のマルティニにジュディッタのことを訊ねる。オクタヴィオは自分の過去を振り返り歌うが(17)、そこへバリモアが現れ、続いてジュディッタも現れる。バリモアは彼女に真珠のネックレスを与え、ジュディッタはこれを首に賭ける。彼らはオクタヴィオに気付かず他の客と去る。

### 「第5場面」

この場面の序奏(17-1/2)ではソロヴァイオリンが響く。ウィーン国立歌劇場に置ける「ジュディッタ」のレハール自身の指揮による初演では、ウィーンフィルの若いカペルマイスターであるウィリ・ボスコフスキーがここで独奏したのであろう。

南欧のホテルの豪華な部屋で左手には別室がカーテンで仕切られ、ピアノが置いてある。2人のウエイターがテーブルに2人分の食事の用意をしている。ここでピアニストとして働いているオクタヴィオは部屋の隅におり、ウエイターは去る。オクタヴィオは愛の歌を歌い(18)ピアノを弾く。ジュディッタはその曲がオクタヴィオと自分の音楽であることに気付き、オクタヴィオが居ることを知る(18-1/2)。ジュディッタの彼に対する愛は再び燃え上がり、“オクタヴィオ”と叫ぶが、オクタヴィオの心はもう冷えてしまっている(19)。侯爵がやってくるのでオクタヴィオはピアノに向かう。侯爵はジュディッタを称え(20)、彼女は無抵抗に侯爵の言うがままに従い、ピアノを弾くオクタヴィオを見ながら出て行く。残ったオクタヴィオはピアノを弾くのを止め、ジュディッタの歌声をこだまの響きのように聞こえると歌いながら幕が下りる。

このように「ジュディッタ」は「カルメン」かイタリアオペラのような悲劇である。レハールの初期のオペレッタとはこの点で全く異なるが、とくに20世紀の新しい音楽の雰囲気を感じられる。たとえば(3)の宿屋の亭主とマニュエラの2重唱などにこの新しさがある。反面、(4)のオクタヴィオの登場はまるでイタリア民謡のような香りがあるし、(7)は古典オペレッタ風かと思えば、(8)はタンゴ、と変化に富んでいる。(12)はプッチーニ調だし、(17-1/2)は映画“モロッコ”か“外人部隊”の音楽のような北アフリカ調である。全曲レコードの演奏はボスコフスキーの指揮、ジュディッタはやや押さえの利いたエッダ・モザーの美しい声、オクタヴィオはニコライ・ゲッダ、またこのレコードではマニュエラのクラウス・ヒルテがいい声をしており、酒場の亭主マルティニを歌うギュンター・ヴェーヴェルの歌う(14)を筆者は好きで、ミレッカーの“ガスパローネ”の市長を思い出させる。その他達者な歌手を揃え、美しい演奏である。若いときに作曲者レハールの指揮の下、このオペレッタを演奏したボスコフスキーならではの名演奏である。

### おわりに

「銀の時代」の代表であるフランツ・レハールのオペレッタを本稿では取り上げたが、ヨハン・シュトラウスを代表とする「金の時代」との違いは鮮明である。レハールのオペレッタは次回取り上げる予定にしている「銀の時代」の他の作曲家の作品とも著しく対照的な、きわめ

て独特の地位を占めているように思える。シュトラウスにも見られたが、レハールの題材は多民族的、歴史的である。しかし、シュトラウスが明るいわルツやポルカをふんだんに取り入れた“喜”歌劇に徹していたのに対し、レハールの後期のオペレッタは“喜”の要素を排除した悲劇的結末を特徴としている。

シュトラウスとレハールのいずれも「歴史」を題材にしたオペレッタを作曲しているが、それらの内容にも多少の相違がある。シュトラウスが台本を得てオペレッタを作曲したのは1860年代以降で、それはオーストリアがプロイセンに破れ、帝国がかっての栄光を失いつつあるときで、人々は浮き世の憂さを忘れようとしていた。レハールの時代、すなわち20世紀初めから第1次世界大戦の時代は、オーストリア・ハンガリー二重帝国がドイツとともに敗れ、恐慌に人々が希望を失った時代である。これらの時代背景は両者の作曲に影響を与えたことは想像に難くないだろう。

また、レハールのオペレッタの特徴としては、ヨーロッパ各地を舞台とする（パリ、ハンガリー、イタリアあるいはジプシーのルーマニアなど）だけでなく、中国やアフリカまで舞台を広げている。レハールはその意味では国際感覚をもっていたのか、あるいは当時の戦争と革命の時代がレハールの眼を世界に向けさせたのであろうか。いずれにしろ、レハールのオペレッタのもう一つの特徴であろう。

銀の時代の代表レハールは上に述べたいろいろな意味において「金の時代」とはっきり異なっている。シュトラウスをはじめとする「金の時代」のオペレッタは、あくまで“大衆”が対象で、上流社会に対する憧れや揶揄により大衆としての楽しみをオペレッタに見いだしていたように思える。これに対し、不安定な20世紀はじめには、大衆も作曲家ももはや自分たちのオペレッタでは満足せず、19世紀には王侯貴族の持ち物であった本格的オペラを指向したのではなかろうか。これに応え、レハールもプッチーニばりの悲劇的オペレッタ、すなわちオペラを目指したのであろう。その結果が「バガニーニ」や「ジュディッタ」のような作品として世に出たと思われる。これらはけっして“オペラ”ではないが、大衆にとっては立派な“オペラ”であったにちがいない。この一般大衆の嗜好が「銀の時代」を作ったのかも知れない。

シュトラウスなど「金の時代」のオペレッタと比べ、レハールのオペレッタにはハンガリーやジプシーの要素もより多く入っているが、その傾向は他の「銀の時代」のオペレッタにも多く見られる。また、レハールのオペレッタの“国際性”という性格は他の「銀の時代」の作曲家、たとえばカールマン、ベナツキーあるいはシュトルツにより、次第にミュージカル化していったように思える。その意味では「銀の時代」はウィーンを中心にしたヨーロッパの伝統的オペレッタの鎮魂の役目をはたしたように筆者には思える。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、ウィーンの友人で植物学者のErich Hübl博士とその令嬢Elisabethは筆者のオペレッタ鑑賞と資料収集に終始力を貸してくれたことに深謝する。

## 引用文献

- EMIGmbH (1967) Das Land des Lächelns.
- Scherle, A. (1985) Giuditta. EMI 27 0257 3.
- Schneidereit, O. (1981) Operetta A-Z. Ein Streifzug durch die Welt der Operette und des Musicals. Henschelverlag Kunst und Gesellschaft, Berlin.
- Schumann, K. (1925/36) Franz Lehar's Bühnenwerk. Glockenverlag, Wien.
- Spiel, H. (1987) Vienna's Golden Autumn 1866-1938. Georg Weidenfeld & Nicolson Ltd., London (別宮貞徳訳「ウィーン、黄金の秋」原書房、1993)
- Strijohann, H. (1985) Erinnerungen an Lehár und an die Uraufführung Giuditta. Ein Gespraech mit Willi Boskovsky. Giuditta, EMI270257 3.
- Würz, A. (1978) Reclams Operettenführer. Philipp Reclam Jun. Stuttgart.
- 増田 芳雄 (1998) ウィーンのおペレッター1. ヨハン・シュトラウスの“こうもり”(Die Fledermaus) について。人間環境科学7:75-129.
- 増田 芳雄 (1999) ウィーンのおペレッター2. ヨハン・シュトラウスのオペレッタ:「ヴェネチアの一夜」、「ジプシー男爵」、および「ウィーン気質」について。人間環境科学8:39-102.
- 増田 芳雄 (2000) ウィーンのおペレッター3. 金の時代。人間環境科学9:25-73.
- 西澤 龍生・渡辺 忠雄 (1976) ウィーン・オペレッタの楽しみーレハール、カールマーン作品選。南江堂。
- 寺崎 裕則 (1983) 魅惑のウィンナ・オペレッタ。音楽の友社。
- 渡辺 忠雄 (1990) ウィーン・オペレッタ探訪。オール出版。
- 渡辺 護 (1989) ウィーン音楽文化史。下。音楽の友社。